

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.156
2019/9/12

目 次

新会長挨拶	1
理事会・総会報告	5
第 35 回年次大会報告	17
第 7 回日本中東学会奨励賞の選考結果	41
第 36 回年次大会の開催について	42
第 25 回公開講演会のお知らせ	42
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	43
寄贈図書	43
会員の異動	44
事務局より	45
編集後記	45

新会長挨拶

大稔哲也

会長に選んでいただきました大稔です。私は本学会事務局長の経験者ではなく、本学会から渉外担当理事として派遣されて地域研究学会連絡協議会の事務局長こそ務めたものの、本学会にはこれまで貢献不足との引け目を感じております。また、私の経歴で過去の会長と異なる点はと考えると、日本の首都圏・関西圏以外の大学に 10 年以上勤務してきたことに思い至ります(山形大学・九州大学。小杉元会長の先例あり)。

それもあって、むしろ本学会には心理的な距離を感じてきた時期が長いと言わざるを得ません。しかし、ひとたび選ばれたからには微力を尽くす所存です。

私のもう一つの特徴は、31年間1年も欠かさずエジプトのオールド・カイロという庶民地区に住むか通うかし続けてきたことです。しかし、これは皆様にとってはどうでもよいことでしょう。こんな有様の私ですが、支えてくれる理事会メンバーは大幅に若返っただけでなく極めて強力です。私を正しい道へと導いてくれるものと確信しております。

35年間の変容

さて、本学会も35年目に入りました。この間の変化に思いを馳せるならば、以前は大学の講義でも、なぜ中東を扱うのかという説明から始めなければならなかったのですが、現在その必要はなくなりました。中東研究の重要性は良くも悪くも常識化したと思われる。しかし、それに伴って本学会に集まる人々の熱や色も薄まってきたような印象を受けます。この間の日本において、例えば中東で占領され続ける人々への共感が、いつの間にか宗教対立に置き換えられてしまいました。

これほど情報の総量が増え、グローバル化が進行してきたにも拘わらず、むしろ日本における中東に対する愛着や、現地研究者との個人的な結びつきは細ってきているのではないかという危惧を覚えます。中東現地の人々と顔を突き合わせ腹を割って付き合う人間が、本学会においても減少しつつある印象を受けます。ただ、これは単に私が齢を重ねただけなのかも知れません。

かつて私が南オールド・カイロ地区というカイロの庶民街に暮らしていた1980年代後半、地区には電話線が来ていなかったため、同じカイロ市内のザマーレク学振センターからの連絡すら電報が頼りでした。それが現在、オールド・カイロから日本まで携帯が容易につながり、時差を忘れた電話に困惑します。現場に行かずして、双方の現実へ不断に介入できるのは実に奇妙な感覚であり、隔世の念を禁じえません。

教育や留学をめぐる環境も激変しつつあり、現地留学や現地調査も難しい局面を迎えつつあります。現地在が混乱していることに加えて、コミュニケーション・ツールとしての英語による一元支配が顕著になるにつれて、現地語による現地留学を行うことの不利が日本の様々な局面で顔を出すようになってきました。この状況に対して、我々はいずこへ学生を送り出し、いかなる教育を選択してもらうべきなのでしょう。あるいは、かかる現地語の不利をいかに逆転させ、有利へとつなげていくべきなのでしょう。

地域研究とグローバル化

地域研究の在り方や地域研究との間合いの取り方にも、変化は生じているはずです。日本中東学会は地域研究の学会と自己規定してきました。そして、日本の地域研究は研究スタンスをより非政治化し、軍事的野心と切り離して独自の展開を遂げてきました。それでも地域が伸縮するばかりか、瞬時に構築・解体され世界内で直結する現代にあって、新たな局面を迎えつつあるようです。

しかし今日、すべてがグローバル化の傾向を示したとしても、依然として確実にローカルな知は求められています。そして、それが我々学会員へも向けられ、専門家としての意見を求められています。我々が現地の人々に、寄り添わずして、誰が現地に寄り添うのでしょうか？（現地へ苦言を呈さないということではなく）。我々には中東の専門家として、いかにしてローカルな知をグローバルな現象や情報と有機的に結びつけていくのかが問われていることでしょう。

今期理事会の課題と取り組み

《国際》

では、この第18期理事会の課題をどのように考えるべきでしょうか。国際化は、日本中東学会がむしろ率先してきた領域といえましょう。本学会が窓口となって、北米中東学会や世界中東学会、韓國中東学会などとのパイプが営々と築かれてきたことはご承知の通りです。また、AFMA（アジア中東学会連合）の継続は特筆すべき成果であり、その意義は計り知れません。現在、ここへシンガポールにも加ってもらえるかどうか、次の論点となりつつあります。

関連して思い起こされるのが、梅棹忠夫初代会長のことです。本学会30年史を繙くと、梅棹氏が板垣雄三氏（第2代会長）とともにイスラミック・カイロを彷徨しておられた折、「これだ」と言われたといいます。そして、日本の中東関係の出先機関を置くならカイロだと考えておられたということでした。しかしながら、カイロの学振研究連絡センターは30年以上を経てもなお、エジプトにおける公的な出先機関としての地位を獲得できずにあります。

他方、多少予測外のところから新たな展開も始まっています。エジプトに2010年に創設されたエジプト日本科学技術大学(E-JUST)は、これまでの理系に加えて、今年から文系にもウイングを拡げ、遺産科学学科や会計学科を増設します。そして、少なからぬ中東研究者が、(私も含めて)ここに関与しております。これも設立の経緯はともかく、日本による中東における教育・研究の一拠点となる可能性を秘めているかもしれません。ちなみに、エジプトにおける日本式初等教育の部分的導入も始まっており、本学会からも多数の方々が関わっておられるはずです。

現在、日本において若年層の減少や経済的活力の減退のもと、以前のような大型の中東研究プロジェクトへ資金供与する余裕は失われており、日本の資金による海外からの大量招聘もより困難となりつつある状況に伴い、海外との関係の切り結び方にも変化がみえてきたように思われます。例えば、この9月に京都で行われるICOM（国際博物館会議）や（手前味噌で恐縮ですが）6月に早稲田大学で開催された第6回国際マムルーク学会のように、中東研究に関連して日本へ国際学会ごと招致して、我々がその中で活躍するというスタイルも増え出しています。今後は、他の国際学会との協働作業に一層力を入れていくとともに、新たな協力の在り方を真摯に模索していくことになりましょう。

《国内関連》

本学会の創設時からの強みとして、大学に籍を置く研究者だけでなく、ジャーナリ

ストやアーティストをはじめとして、多様な市民を包摂する裾野の広がりが挙げられます。また、そのような団体として、中東との交流を深めることは極めて重要でしょう。裾野の広がりという側面は、本学会による恒常的な市民講座やイベントを通じても強化されていると思われますが、本事務局では今回、「観光」の切り口から一連の市民講座を新たに開講することを検討しております。また、すでに従事しておられる皆様もあるかと存じますが、日本の教育現場で様々な背景を持つ生徒への支援協力も、我々には可能と思われます。

日本中東学会は、比較的に女性研究者が活躍する学会とされてきました。しかし、まだ女性会長は歴代で1名のみであり、事務局長に至ってはゼロです。何か対策を講じる時期に来ているのかも知れません。「人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)」への協力も真剣に考えるべきでしょう。

同様に、私の世代は相対的に数が多いため、その存在自体が下の世代にとっては疎ましく映るかも知れません。若手の登用と支援策の模索も必須でしょう。先にニューズレターでお伝えしましたように、本学会には学生会員割引だけでなく、常勤職未満の研究者に対する会費割引制度がありますので、これをさらにアピールしていきたいと思います。

《事務局運営》

35年の間に肥大化してしまった本学会業務の簡素化は、焦眉の課題と認識しています。多くの他学会と同様に、中東学会でも事務局と大会開催校の引き受け手を探すのに汲々としております。背景として、大学や各種研究機関がそのような余力を完全に失いつつあることが挙げられましょう。大学や各種研究機関における研究・教育環境の劣化を痛感せざるを得ません。

そのような中で今回、火中の栗を拾い、事務局長の要職を引き受けてくれた安田慎さん(高崎経済大学)、および副事務局長の須永恵美子さんには、改めてこの場を借りて心から感謝申し上げます。同時に、少しでも事務局の負担を軽減させ、若手を中心とした会員がより主体的に本学会の運営や大会主催に関われるよう、考えを巡らせる必要があります。あくまで、手弁当で人々が集まっていたような学会草創期の息吹を取り戻しながらのことです。簡素化によって不要なルーティーンを取り払い、学会への熱情を取り戻す試みとも位置づけられましょう。

そこで、先の理事会や総会でもすでに議論を始めたのですが、現在事務局が行っている業務の一部分を外部業者へ委託することを本格的に検討してはいかがでしょうか。この議論を始めるにあたって、今回、須永副事務局長が他学会の状況を詳細に調べあげてくれました。それによると、日本中東学会より大規模の学会は言うに及ばず、我々と同じく地域学会連絡協議会に参加している中で、我々と同規模もしくはより小規模な学会でも、多くが学会業務の外部委託を行っていることが判明しました。私もこの結果を目の当たりにして認識を大きく変え、本学会業務の外部委託を真剣に考える時期にきていることを痛感しました。今後、この検討をさらに深めていきたいと願っております。

また、事務局については今回、もう一つの新たな試みを行っています。事務局を高

崎という東京からは微妙な遠距離に置くというものです。これは情報機器の進歩の著しい今日にあって、多少事務局と会長が離れていても、そして事務局が多少地方にあっても、業務が遂行可能であるということを示す重要なチャレンジと位置づけております。これによって今後、事務局の引き受け手の幅が広がることを期待しています。

最後に

これまで本学会の先達たちが築き上げてきた営為と、中東研究自体の持つ叡智をとにも活かす必要を感じています。中東研究のプロとしての自覚を持ち、中東の人々との真摯な関係を持続しようとする強い意志は、グローバル化の時代になっても益々求められていると感じます。

新聞やインターネットを開けば、世界中の不正義や社会矛盾がみな中東へ送り出されてそのまま山積している感すら覚えます。分断や対立を煽り、ナショナリズムに訴えて政治的基盤を強化する手法も頻見されます。力にまかせて、不正義や国際法に反する行為がまかり通る時代に、無力感に苛まれながらも、我々は中東研究の営為を日常的に積み重ねてゆかねばなりません。イランをめぐる世界情勢も予断を許しません。我々には専門性に裏打ちされた情報を提示することによって、論理的かつ理性的な判断へ導くよう努める責務がありましょう。

現在、宗教や「民族」に関する比率が様々なスケールで変化し、ムスリムが世界最大の信徒数を抱えるようになりつつある途上にあつて、シリアスな軋轢は続くかも知れません。しかし、この紛れもない数の現実と冷徹に向き合う叡智を示すことも、本学会には求められていることでしょう。(歴史的にも今日的にも)共生は理想ではなく、苦くとも現実でしょう。

我々には、日本を通じて世界の中東研究をより良きものとしていくという使命があります。そのための貢献を惜しまない皆様の列の末尾に私も加わることができるならば、それに勝るのぞみはありません。大変長くなりましたが、どうかお力添えを賜れば幸いです。

《追記》

去る5月の年次大会は秋田大学で開催されました。縄田浩志会員をはじめとする秋田大学の皆様には、この場を借りて重ねて篤く御礼申し上げます。お陰様で、秋田でなければできないという内容に富んだ印象深い大会となりました。

理事会・総会報告

【2019年度第1回理事会報告】

日時：2019年5月11日（土） 9:00～12:00

場所：秋田市にぎわい交流館 AU 四階・研修室3

出席者：秋葉淳、岩崎えり奈、江川ひかり、大稔哲也、勝沼聡、菊地達也、黒木英充、
近藤信彰、末近浩太、東長靖、錦田愛子、三沢伸生、森山央朗、安田慎、横田貴之
欠席者：山岸智子（委任状あり）

〔報告事項〕

1. AJAMES 編集について報告と説明があった。
2. 国際交流事業について、韓国中東学会（KAMES）から第 35 回日本中東学会大会に 4 名の参加があることが報告された。
3. 2019 年度公開講演会の企画について報告と説明があった。
4. 第 7 回日本中東学会奨励賞の選考結果について報告があった。
5. 第 36 回年次大会の開催校について報告があった。
6. 学会の Paypal 口座の状況について報告があった。

〔審議事項〕

1. 2018 年度事業報告・2018 年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
2. 2019 年度事業計画・2019 年度予算案を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
3. 2019 年度韓国中東学会年次国際会議に、日本中東学会から招聘者 2 名とは別に 3 名派遣することについて報告があり承認した。
4. 会則の変更について議論の上承認した（詳細は総会議事録を参照）。
5. 会員動向・強制退会者について報告があり承認した。
6. 日本中東学会特別会計監査報告について説明があり、今後の対応を確認した。
7. ニュースレターの完全電子化について提案があり承認した。
8. 学会事務局業務の外部委託について、今後本格的に検討することを確認した。
9. 総会議事次第および資料を確認した。
10. 人文社会科学系学協会における男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）について対応を確認した。また、総会の委任状提出方法を検討することを確認した。

【2019 年度日本中東学会第 35 回年次大会総会議事録】

日時：2019 年 5 月 11 日（土）17:00～18:10

会場：秋田市にぎわい交流館 AU

出席：当日出席者 68 名、委任状提出 125 名、計 193 名

（会員総数 653 名に対する総会定足数 5 分の 1（131 名）を満たしたことにより、総会成立）

1. 司会および総会役員の選出

鷹木恵子会員の司会により、議長として堀川徹会員、書記として高尾賢一郎、澤井真

両会員、議事録署名人として子島進、堀抜功二両会員を選出した。

2. 2018 年度事業報告および決算

第 17 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告（報告：勝沼聡 第 17 期事務局長）

1) 第 34 回年次大会を、2018 年 5 月 12～13 日に、上智大学四谷キャンパスにおいて開催した。

- ・ 公開シンポジウム「十字軍と現代：ヨーロッパ、中東、そして日本」（上智大学イスラーム研究センター共催、上智大学総合グローバル学部協賛）
- ・ 研究発表 8 部会 69 本、企画セッション 4 本。

2) 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 34-1 号、第 34-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。

- ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・ 科学技術振興機構 (JST) の運営科学技術情報発信・流通総合システム (J-stage) においてバックナンバーの公開（第 33 巻 2 号まで）を行った。

3) 2018 年 10 月 6 日に第 24 回公開講演会「若手中東研究者と語ろう！：現代中東における結婚と離婚」を横浜 YWCA 3 階ホール（横浜市）において開催した。

4) 海外の関連学会との交流を促進した。

- ・ 第 34 回年次大会に、韓国中東学会から KIM Donghwan 事務局長ほか 3 名を招待した。
- ・ 2018 年 7 月 16 日～20 日にセヴィーリャ（スペイン）で開催された第 5 回中東研究世界大会（World Congress for Middle Eastern Studies）に 2 つのパネルを派遣した。
- ・ 2018 年 9 月 8～9 日に、北京の中国社会科学院を会場に開催された第 12 回 AFMA（アジア中東学会連合）大会に日本中東学会から理事 2 名（黒木英充会長、勝沼聡事務局長）と会員 3 名が参加し、黒木会長・勝沼事務局長を除く 3 名が研究発表を行った。
- ・ 2018 年 10 月 12 日～14 日、ソウルの韓国外国語大学校 (Hankuk University of Foreign Studies) を会場に開催された韓国中東学会 (KAMES) 主催の国際会議 “The Middle East in an Era of Transition: Reorganization of the Regional Order and the Search for Partnership” に日本から黒木英充会長をはじめとする会員 10 名と韓国在住の会員 1 名が参加した。

- 5) ニュースレター和文 4 回 (総頁 83 頁) を発行した。第 151 号 (5/7、9 頁)、第 152 号 (9/11、年次大会特集、40 頁)、第 153 号 (12/21、19 頁)、第 154 号 (3/18、15 頁)。
- 6) 「日本における中東研究文献データベース 1989-2019」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- 7) 学会ウェブサイトの一部改修を行った。
- 8) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- 9) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
- 10) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行った。
- 11) 会員の増減 : 2018 年度中には入会者 33 名、退会者 96 名 (自主退会 14 名 / 強制退会 82 名) の異動があった。その結果、2019 年 3 月 31 日現在の会員数は 653 名 (正会員 516 名 / うち海外在住 19 名 ; 学生会員 137 名 / うち海外在住 6 名) となった。

(2) AJAMES 編集報告 (報告 : 近藤信彰 第 17 期編集委員長)

- ・ AJAMES 第 33-1 号、第 33-2 号がそれぞれ 2018 年 7 月と 2019 年 2 月に刊行された。
- ・ 第 34-1 号では、論文 2 本、研究ノート 2 本、書評 2 本が掲載された (投稿総数 12 本)。
- ・ 第 34-2 号では、論文 3 本、研究ノート 1 本、書評 2 本、英語博士論文要旨 2 本が掲載された (投稿総数 10 本)。
- ・ AJAMES 第 33-1, 2 号までを J-stage で公開した。

(3) 2018 年度決算報告 (報告 : 勝沼聡 第 17 期事務局長)

- ・ 総収入は 27,313,619 円、内訳は以下の通りであった。
- ・ 2017 年からの繰越金が 18,443,868 円、年会費収入が 6,059,000 円、AJAMES 販売代金を含む、その他の収入が 2,810,751 円。
- ・ 総支出は 27,313,619 円。これによって総収入額と一致。内訳は以下の通りのものであった。
- ・ 事務局費 : 1,401,281 円、事業費 5,441,079 円、2019 年度への繰越金 : 20,471,259 円。

- ・ その他、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金の収支についても報告があった。

(4) 監査報告（報告：鈴木均 第17期監事）

- ・ 2019年4月12日に学会事務局（慶應義塾大学）にて、2018年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

<質疑応答>

（質問）強制退会者数の多さは会費の滞納、未納が原因か。

（回答）（勝沼聡第17期事務局長）本年度33名の新入会員に対し、96名の退会者が生じることになった。これは会則の規定にならい、3年以上の年会費滞納者を理事会の承認を経て退会させた。数が多いことについては、17期の初年度を含めて過去、強制退会がほとんどされてなかったことによる。改めて今回調べたところ、滞納者数が多いことが判明。住所が分かる会員には送付で、住所が不明な会員はメールで年会費納入を督促し、連絡先が全く分からない会員についてはニューズレターに氏名を掲載して督促を図った。今回強制退会となったのは、これらの督促に応じなかった会員である。一度に大量の退会者を出したことは（過去の）事務局の怠慢に起因する。督促を出すのも手間であるため、今後の業務負担を減らすべく、強制退会の措置に踏み切った。

<採決> 以上の2018年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

3. 理事任務分掌確認（報告：安田慎 第18期事務局長）

- ・ 理事の任務分掌については下記の通りである。
- ・ 会長：大稔哲也、事務局長：安田慎（特任理事）、総務担当：勝沼聡、AJAMES編集委員会：横田貴之（編集委員長）、近藤信彰（副編集委員長）、錦田愛子（副編集委員長）、国際交流委員会：黒木英充（委員長）、岩崎えり奈、東長靖、企画担当：森山央朗、末近浩太、広報担当（旧ホームページ担当）：三沢伸生、財務・会則担当：江川ひかり、渉外担当：菊地達也、ニューズレター・書記担当：秋葉淳、年次大会担当：山岸智子。

- ・ 監事について、赤堀雅幸会員、竹村和朗会員を任命することが提案された。

＜採決＞ 以上の第 18 期理事・監事について、総会はこの承認した。

4. 2019 年度事業計画および予算

第 18 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 2019 年度事業計画（報告：安田慎 第 18 期事務局長）

- 1) 第 35 回年次大会を 2019 年 5 月 11～12 日に、秋田市にぎわい交流館 AU と秋田大学において開催する。
- 2) 学会事務局を慶應義塾大学から高崎経済大学へ移転する。
- 3) 日本中東学会年報（AJAMES）第 35-1 号（2019 年 7 月）、第 35-2 号（2020 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「国際情報発信強化」の助成を受ける。
- 4) 第 25 回公開講演会を「素顔の中東・イスラーム」を 2019 年 11 月 17 日（日）に山口市民会館小ホール（山口県山口市）で開催する。
- 5) ニュースレターを年数回発行する。
 - ・ これまで紙媒体で発行してきた年次大会特集号についても、紙媒体での発行を取りやめ、電子媒体による発行のみとする。ただし、希望する会員には、紙媒体での発行・送付を行う。
- 6) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2020」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- 7) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- 8) 海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・ 第 35 回年次大会に、韓国中東学会から LEE In-Seop 会長と SONG Sang Hyun 事務局長を招待する。
 - ・ 2019 年度韓国中東学会国際会議に本学会から数名を派遣する。
- 9) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- 10) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。

- 11) 2019-2020 年度会員名簿を刊行する。
- 12) 広報委員会を新たに設置し、学会の情報発信を強化する。

(2) AJAMES 編集報告（報告：横田貴之 第 18 期編集委員長）

- ・ 現在、第 35-1 号の刊行準備を進めており、7 月に刊行予定である（投稿総数 16 本、掲載 11 本）（論文 1、研究ノート 2、英語特集論文 4、資料紹介 1、書評 3）
- ・ 第 35-2 号は 2019 年 6 月 1 日に締め切り、2020 年 1 月に刊行予定。
- ・ 編集委員会を、横田貴之編集委員長、近藤信彰副編集委員長、錦田愛子副編集委員長の体制で行う。また、編集委員に新たに吉岡明子会員、吉村武典会員を加える。

(3) 2019 年度予算案（報告：安田慎 第 18 期事務局長）

- ・ 総収入は、28,564,572 円。内訳は以下のとおりである。
 - ・ 2018 年度からの繰越金：20,471,259 円、その他 2,750,063 円
- ・ 総支出は、28,564,572 円。内訳は以下のとおりである。
 - ・ 事務局費：1,960,000 円、事業費：7,970,000 円、2020 年度会費分留保：2,556,000 円、2020 年度への繰越金：16,078,572 円。
- ・ 前年度と比べて支出が増減する項目は次のとおり。アルバイト謝金、通信費、事務局移転費、大会会場費、ウェブサイト改修費、広報委員会事業費、国際発信強化旅費（海外招聘・海外派遣）、NL 発行費・通信費、会員名簿発行費・通信費、地域研究学会連絡協議会分担金。
 - ・ アルバイト謝金、通信費については、事務局のアルバイトを常時 2 名体制にするとともに、会長他との書類のやり取りが増える為に増額した。また、事務局移転にともなう送付物のやり取りの費用も計上した。
 - ・ 大会会場費は秋田市にぎわい交流館 AU、ならびに秋田大学での開催によって減額された。
 - ・ 国際発信強化旅費（海外招聘）については、大会の秋田開催に伴って韓国からの招聘者が延泊せざるを得ない為に増額した。

- ・ 国際発信強化旅費（海外派遣）については、KAMES 国際会議への派遣を予定している為に計上した。
- ・ ウェブサイト改修費については、昨年度からのウェブサイトの全面改修作業が昨年度に終わらず、今年度も継続している為、残り支出分を計上した。
- ・ 広報委員会事業費については、広報委員会の実際の事務作業を行うアルバイトへの謝金を計上した。
- ・ NL 発行費・通信費については、NL の電子化にともなって伴って減額した。
- ・ 今年度は隔年の会員名簿発行年度に当たるため、その発行費・通信費を計上した。
- ・ 隔年の地域研究学会連絡協議会分担金を計上した。
- ・ 学会奨励賞特別基金については、今年度が隔年の対象年度である為に計上した。
- ・ 今年度より賞状ケースを追加し、副賞を口座振込としたことに伴い、ケース代と振込手数料を計上した。

<質疑応答>

(質問) ウェブサイト改修費と広報委員会立ち上げ費用について、ウェブサイト改修費用 80 万円はどのような使い道なのか。また、SNS 活用と広報委員会事業費 50 万円との関係はどのようなものか。

(回答) (安田慎事務局長) ウェブサイト改修費については、昨年度から行っていたウェブサイト全面改修が今年度も継続するため、その残りの金額 80 万円を支出予定である。広報委員会事業費については、ウェブサイトや SNS、メーリングリストの管理・運用を行う為のアルバイト謝金として計上した。

<採決>以上の 2019 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. 会則・細則変更（報告：江川ひかり 第 18 期担当理事）

- 1) 広報委員会設置に伴う会則・細則変更（会則第 10 条、細則Ⅷの追加）について、三沢伸生理事より説明があった。併せて、今後内規を定めていくことについて説明があった。
- 2) 事務局・事務局長に関する細則（細則 V.）の変更について、大稔哲也会長より説明

があった。

- 3) 「Ⅷ. 広報委員会について」の細則追加にともない、細則Ⅷ、Ⅸの番号をⅨ、Ⅹにすることについて、江川理事より説明があった。

<採決>以上の会則・細則の変更について、総会はこれを承認した。

6. 特別会計監査報告（報告：勝沼聡 第17期事務局長）

- ・ 2018 年度年次大会総会において設置された特別会計監査報告について、赤堀雅幸担当理事（第17期）による報告書をもとに、勝沼聡第17期事務局長より説明があった。
- ・ 赤堀雅幸担当理事が 2008 年度から 2017 年度までの過去の帳簿・決算表と口座残高（銀行口座、振替口座、Paypal 口座）を再監査し、照合を行った。
- ・ その結果、2013 年を除いて、意図的な不正はないものの、継続して会計上不適切な手続きがあったことが明らかになった。
- ・ この背景としては、事務局や監事が年度末に会計締めすべきであることを十分に認識していなかったことや、年度末における会計業務の多忙さや新旧事務局交代に伴い、引継ぎが円滑に行われなかったことが挙げられる。
- ・ 以上を踏まえ、帳簿と実残高の年度末照合の徹底、事務局交代に伴う意思疎通の徹底、監査体制の実質化と徹底を行う点が確認された。それに伴い、特別監査を行った赤堀雅幸会員を第18期監事として指名したことも確認した。

<採決> 以上について、総会はこれを承認した。

7. その他：

- ・ 理事会における事務局業務の外部委託に関する本格的な検討の承認（報告：安田慎 第18期事務局長）
 - ・ 事務局の業務負担が過重になっている点や、地域研究連絡協議会に参加している 19 学会中、13 学会が既に外部委託を行っている状況に鑑み、事務局の外部委託化を進めたいと考えている。外部委託化によって、事務局の負担軽減と運営経費節減が期待される。

- ・ 前納制廃止についての意見募集（報告：江川ひかり 第 18 期担当理事）
- ・ 繰越金の多さに鑑み、前納制を廃止しても安定した学会運営が可能と判断し、当該年度の支払いとする協議を始めた。来年度にかけて議論を行うので、会員からの意見を幅広く伺いたい。
- ・ 広報委員長の任命（報告：大稔哲也 第 18 期会長）
- ・ 会則・細則変更によって設置された広報委員会の委員長に、三沢伸生理事を推挙する提案がなされた。

<採決> 以上について、総会はこれを承認した。

8. 学会賞

- ・ 第 7 回学会奨励賞について、東長靖選考委員長より概要の説明が行われた。
- ・ 選考委員会（東長靖第 16 期会長、栗田禎子第 15 期会長、近藤信彰第 17 期 AJAMES 編集委員長）において検討した結果、大淵久志会員（東京大学大学院）の下記の論文（『日本中東学会年報』34-1 号に掲載）が学会奨励賞に選ばれた。

OBUCHI Hisashi (大淵久志), “Fakhr al-Din al-Razi and Occult Science as Philosophy: An Aspect of the Philosophical Theology of Islam at the Beginning of the Thirteenth Century,” *AJAMES*, 34-1 (2018), pp. 1-33.
- ・ 受賞者の大淵久志会員には、賞状と副賞 20 万円の目録が大稔哲也会長より贈呈された。

9. 会長挨拶（大稔哲也会長）

10. 議事終了につき、司会の堀川会員により閉会が宣言された。

2018年度決算案

本会計

収入	18年度予算	18年度決算
2017年度よりの繰越金	18,443,868	18,443,868
年会費	5,352,700	6,059,000
正・学生会員	5,352,700	6,059,000
2014年度以前分	-	165,000
2015年度分	117,000	105,000
2016年度分	268,800	260,000
2017年度分	439,400	525,000
2018年度分	1,654,800	2,530,000
2019年度以降分	2,872,700	2,474,000
賛助会員	0	0
その他	2,750,050	2,810,751
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	2,500,000
利子	50	63
AJAMES販売代金	250,000	298,688
AJAMES掲載料	0	5,000
海外郵送費実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
NII-ELS著作権料	0	0
錯誤振込	0	7,000
収入合計	26,546,618	27,313,619

(単位:円)

2019年度への繰越金内訳	20,471,259
郵便振替口座	13,867,174
三井住友銀行口座	6,599,763
Paypal口座	0
現金	4,322

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金	447,840	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	4	
託児所利用料	71,000	
第34回大会託児所運営費		115,030
振込手数料		108
2019年度への繰越金		453,706
合計	568,844	568,844

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金	1,905,876	
(片倉もとこ研究奨励基金を含む)		
奨励金		0
利子	68	
2019年度への繰越金		1,905,944
合計	1,905,944	1,905,944

(単位:円)

支出	18年度予算	18年度決算
事務局費	1,790,000	1,401,281
アルバイト謝金	1,200,000	938,500
通信費	60,000	175,996
消耗品費	80,000	33,173
会議費	30,000	35,580
交通費	150,000	27,820
振込手数料	20,000	24,714
事務局備品費	150,000	62,114
事務局移転費	0	8,820
資料保管費	100,000	87,564
錯誤振込返金	0	7,000
事業費	8,948,000	5,441,079
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	278,000	277,800
AJAMES編集費	300,000	97,980
同欧文校閲費	550,000	58,617
同印刷製本費	2,100,000	1,459,923
編集委員会旅費	150,000	121,860
AJAMES宣伝費	100,000	0
ウェブサイト改修費	2,000,000	736,400
国際発信強化旅費(海外招聘)	300,000	408,448
国際発信強化旅費(海外派遣)	730,000	542,998
国際交流費	150,000	8,035
ニューズレター等発行費	100,000	147,744
NL発送費	100,000	90,580
AJAMES国内発送費	150,000	174,902
AJAMES海外発送費	300,000	51,340
選挙費用	150,000	109,267
インターネット広報費	440,000	391,652
公開講演会開催費	300,000	57,442
中東・イスラム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
年次大会特別基金への繰り入れ	100,000	100,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	6,091
支出合計	10,738,000	6,842,360
2019年度への繰越金	15,808,618	20,471,259
総計	26,546,618	27,313,619

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金	638,585	
本会計よりの繰り入れ	100,000	
利子	8	
大会実行委員会余剰金	310,004	
2019年度への繰越金		1,048,597
合計	1,048,597	1,048,597

(単位:円)

2019年度予算案
本会計

収入	18年度予算	19年度予算
2017年度よりの繰越金	18,443,868	—
2018年度よりの繰越金	—	20,471,259
年会費	5,352,700	5,343,250
正・学生会員	5,352,700	5,343,250
2015年度以前分	117,000	—
2016年度分	268,800	56,100
2017年度分	439,400	115,000
2018年度分	1,654,800	356,400
2019年度分	2,872,700	2,259,750
2020年度以降分	—	2,556,000
賛助会員	0	0
その他	2,750,050	2,750,063
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	2,500,000
利子	50	63
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
海外郵送費実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
NII-ELS著作権料	0	0
収入合計	26,546,618	28,564,572

(単位: 円)

(参考) 各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額(円)	前年度(2018年度)納付率
2015年度分		12%
2016年度分	330,000	20%
2017年度分	460,000	31%
2018年度分	990,000	64%
2019年度分	3,275,000	40%
2020年度分	5,680,000	
合計	10,735,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額: 本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率: 予算策定年度の前年度決算(たとえば2019年度

予算であれば2018年度)における会費納付額÷

前年度予算に書かれている未納額×100

* 2019年度予算に書かれている各年度(2016～2020年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2018年度における納付率(=2018年度決算における会費納付額÷2018年度予算に書かれている未納額)に5を足した値の1/100を掛けることによって算出してい

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2018年度よりの繰越金	568,844	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	4	
第34回大会託児所運営費		60,000
2019年度への繰越金		558,848
合計	618,848	618,848

(単位: 円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2018年度よりの繰越金	1,048,597	
第34回年次大会運営費		100,000
利子	8	
本会計よりの繰り入れ	100,000	
2019年度への繰越金		1,048,605
合計	1,148,605	1,148,605

(単位: 円)

支出	18年度予算	19年度予算
事務局費	1,790,000	1,960,000
アルバイト謝金	1,200,000	1,300,000
通信費	60,000	80,000
消耗品費	80,000	80,000
会議費	30,000	30,000
交通費	150,000	150,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	150,000	150,000
事務局移転費	—	50,000
資料保管費	100,000	100,000
事業費	8,948,000	7,970,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	278,000	165,000
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校閲費	550,000	550,000
同印刷製本費	2,100,000	2,100,000
編集委員会旅費	150,000	150,000
AJAMES宣伝費	100,000	100,000
ウェブサイト改修費	2,000,000	800,000
広報委員会事業費	—	500,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	300,000	400,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	730,000	300,000
国際交流費	150,000	150,000
NL発行費	100,000	5,000
会員名簿発行費	—	150,000
NL発送費	100,000	5,000
会員名簿発送費	—	100,000
AJAMES国内発送費	150,000	150,000
AJAMES海外発送費	300,000	300,000
選挙費用	150,000	—
J-Stage公開費	440,000	440,000
公開講演会開催費	300,000	550,000
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究会学連協協賛会分担金	0	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	100,000	100,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	10,738,000	9,930,000
2019年度への繰越金	15,808,618	
2020年度会費分留保		2,556,000
2020年度への繰越金		16,078,572
総計	26,546,618	28,564,572

(単位: 円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2018年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,905,944	
奨励金(片倉基金より)		200,000
賞状・賞状ケース代		2,000
振込手数料		432
利子	68	
2019年度への繰越金		1,703,580
合計	1,906,012	1,906,012

(単位: 円)

第 35 回年次大会報告

【プログラム】

＊氏名の右側の（ ）内は所属。Jは大学院生を指す。

第1日：2019年5月11日（土）秋田市にぎわい交流館 AU 多目的ホール
公開講演会

「中東地域における多元的資源観の醸成を目指して」

宮本律子（秋田大学） 全体司会

藤井光（秋田大学、大学院国際資源学研究科長） 挨拶

西尾哲夫（国立民族学博物館）「フォーラムとしての現代中東地域研究の可能性」

縄田浩志（秋田大学）「文理融合／異分野連携の中東地域研究：人文学がつなぐ
研究と実践の事例より」

藤井光（秋田大学）「中東地域の技術者との業務、研究を通じた交流」

千代延俊（秋田大学）「アブダビにおける石油開発と地球温暖化ガス削減」

渡辺寧（秋田大学）「中東地域の鉱物資源」

保坂修司（日本エネルギー経済研究所）「中東の資源をめぐる日本の外交と中東
研究」

質疑応答・総合討論

座長：稲垣文昭（秋田大学）

登壇者：講演者6名、安達毅（秋田大学）、坂梨祥（日本エネルギー経済研究所）

コメンテーター：片倉邦雄（元駐UAE・駐イラク・駐エジプト大使）

第7回日本中東学会奨励賞授賞式・日本中東学会総会

秋田大学竿燈会妙技披露（エリアなかいち にぎわい広場）

懇親会（秋田キャッスルホテル）

第2日：2019年5月12日（日） 秋田大学手形キャンパス一般教育1号館

企画セッション（1～8）、個人研究発表（第1～8部会）

秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館案内

【企画セッション】

企画セッション1

「中東の都市と農村における公共空間の変容」

深見奈緒子（日本学術振興会）・吉村武典（大東文化大学）・宍戸克実（鹿児島県立
短期大学）「都市の街路と施設にみる公共空間の変容：エジプト、カイロ旧市街
の事例から」

岡戸真幸（人間文化研究機構）「アホワ（喫茶店）と出稼ぎ労働者の関わり：エジプ
ト、アレクサンドリアの事例から」

北澤義之（京都産業大学）・岩崎えり奈（上智大学）「ヨルダンにおける公共空間としての Diwan：ヨルダン北部の事例」
コメンテーター：私市正年（順天堂大学）

企画セッション2

「大塚モスクによる難民支援：在日ムスリムによる国際協力の一例として」
司会・趣旨説明：子島進（東洋大学）
岡井宏文（早稲田大学）「在日イスラーム団体の社会活動とネットワーク：日本イスラーム文化センターを事例として」
佐藤麻理絵（日本学術振興会）「トルコにおけるシリア支援の構図：大塚モスクを起点とした人的ネットワークを中心に」
コメンテーター：日下部尚徳（東京外国語大学）

企画セッション3

「アラビア語のダイグロシアの現在」
榮谷温子（慶應義塾大学）「ダイグロシアとは？」
榮谷温子（慶應義塾大学）「アラビア語エジプト方言版のウィキペディアに見るダイグロシア」
モハンマド・ファトヒー（東京外国語大学・外務省）「アラビア語圏における言語状況：エジプトに見られるダイグロシアの現況」
岡崎英樹（四天王寺大学）「書き言葉としてのダーリジャ：モロッコにおける言語生活の変容」
近藤久美子（大阪大学）「アラビア語教育をめぐるダイグロシアの問題：非母語話者への教育の場に」（キャンセル）

企画セッション4

「多角的アプローチを通じて解明するシリア紛争の影響：人々の意識変化に関する量的研究、質的研究」
司会：高岡豊（中東調査会）
浜中新吾（龍谷大学）「シリア政府支配下住民と国内避難民の国際関係認識：政治的認知地図によるアプローチ」
錦田愛子（慶應義塾大学）「帰還をめぐる思い：シリア難民の移動に対する意識の比較分析」
青山弘之（東京外国語大学）「黙殺されてきたシリア内戦最大の被害者たちは何を欲しているか：IDPs 世論調査結果の地域研究的解説」

企画セッション5

「ムスリム社会における社会的弱者の権利：子ども・患者・貧困者」
司会：長沢栄治（東京外国語大学）

小野仁美（神奈川大学）『子の利益』とは何か：チュニジアにおける離婚後の子の
監護権をめぐる議論
森田豊子（鹿児島大学）「現代イランにおける子どもの人権とイスラーム：『子ども
と若者の保護法』をめぐる議論」
細谷幸子（国際医療福祉大学）「イランにおける患者の権利をめぐる議論：映画監督
キアロスタミの死を契機として」
村上薫（アジア経済研究所）「貧者の権利とは何か：トルコの公的扶助の実践に見る
権利概念の複数性」
コメンテーター：堀井聡江（桜美林大学）

企画セッション6

「メディアとイスラーム思想／知の連環」
司会：千葉悠志（公立小松大学）
黒田彩加（日本学術振興会）『現代のムスリム』誌にみるイスラーム改革思想の一
展開：エジプト知識人の活動と『対話』をめぐる言論空間の形成
相島葉月（国立民族学博物館）「エジプト人中流層のメディア消費と教養としての
スーフィズムの形成」
千葉悠志（公立小松大学）「テレビ時代におけるイスラーム思想／知についての考
察：高まる企業家の役割」

企画セッション7

「サウディ・アラビア、ワーディ・ファールティマにおける半世紀後の再調査：片倉も
とこ調査資料の活用とその展開」
司会：片倉邦雄（片倉もとこ記念沙漠文化財団）
石山俊（国立民族学博物館／片倉もとこ記念沙漠文化財団）「ワーディ・ファールティマ
における土地利用・農業の変容」
遠藤仁（人間文化研究機構／秋田大学）「サウディ・アラビア、ワーディ・ファールティ
マにおける物質文化の記録保存」
郡司みさお（片倉もとこ記念沙漠文化財団）「ワーディ・ファールティマにおける女性
民族服飾の多様性と変容」
藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）「半世紀前の被写体女性の氏名・親族関係
の同定：片倉もとこワーディ・ファールティマ調査の継続から」

企画セッション8

「変容するエネルギー資源国のガバナンスの現状と課題：イラン、UAE、中央アジア
の比較分析」
司会：稲垣文昭（秋田大学）
稲垣文昭（秋田大学）「中央アジアにおけるエネルギー資源を巡る対立と和解：タジ
キスタンとウズベキスタンの二カ国関係を事例に」

坂梨祥（日本エネルギー経済研究所）「イランにおける『イスラーム新思考』の現在」
堀抜功二（日本エネルギー経済研究所）「アラブ首長国連邦における国民形成の系譜：『アラブの春』後の政治現象に注目して」
コメンテーター：安達毅（秋田大学）・清水学（（有）ユーラシア・コンサルタント）

【個人研究発表】

第1 部会

小野亮介（早稲田大学）「批判対象としてのゼキ・ヴェリディ・トガン」
私市正年（順天堂大学）「*Al-Ruh* 紙とアルジェリア・ナショナリズム運動の再考」
鈴木均（日本貿易振興機構アジア経済研究所）「デモダナイゼーションとサイコナショナリズム再考」
竹村和朗（高千穂大学）「“人民の権利のため”：エジプトの国有地返還請求キャンペーンの論理と制度化の考察」
高尾賢一郎（日本学術振興会）「サウジアラビアにおける『公式』イスラーム言説の展開」
石神美代子（九州大学 J）「『アラブの春』後のクウェートにおける青年層向け起業支援策の急増について」

第2 部会/Session 2（日本語）

教室／Room 1-303

池端蒔子（日本学術振興会）「宗教間対話の新しい国際戦略：イスラーム諸国と国連の場合」
桐原翠（京都大学 J）「ハラール認証制度とイスラーム法の越境性：グローバル化とローカル化の間で」
野中葉（慶應義塾大学）「現代インドネシア社会におけるニカーブ着用現象」
足立真理（京都大学）「イスラーム経済思想における福祉的概念の探求：貧困の定義とマカーシド・シャリーア論の展開に着目して」
野中恵子（一橋大学 J）「『平明丸』事件（1921 年）の再検討：第一次世界大戦の完全終結過程において事件が持つ意味」
清水学（（有）ユーラシア・コンサルタント）「平田篤胤・佐藤信淵からモーゼス・ヘスおよびヘルツェルのシオニズムを考える：類的存在と労働」

第3 部会

Haidar Reda Mohamad (Chiba University, J) “The Revival of Tribalism during the Sectarian Conflicts in the Post Saddam Era”
Mostafa Khalili (Doshisha University, J) “The Merging Process of Tribal Identity into the Ethnic Identity: The Case Study of Qarapapaq Tribe in Sulduz Plain at the North West of Iran”
Qolamreza Nassr (Hiroshima University) “Obstacles of Political Party Growth and Delay of Factional Coalition in Post-Revolution Iran”

Scott Morrison (Oxford Brookes University) “*Takaful* (Insurance): Islamic Legal Arguments and Modern Structures”

二ツ山達朗 (平安女学院大学) 「クルアーンが記されたモノはどこへ行くのか? : チュニジア南部における室内装飾具の事例から」

小島宏 (早稲田大学) 「ベルギーのムスリム若者における宗教実践行動の関連要因 : 兄弟姉妹構成の影響を中心とする分析」

第4部会

吉村貴之 (早稲田大学) 「アルメニア人虐殺追悼集会からレバノン内戦へ : レバノンのアルメニア人社会の変容」

岡部友樹 (京都大学 J) 「レバノン内戦とシリア内戦 : 比較は可能か」

山尾大 (九州大学) 「宗派主義の政治的意味をはかる : イラク主要紙の量的テキスト分析」

小山友 (千葉大学 J) 「移民政党 DENK の台頭とその政治的影響 : オランダのイスラム系移民をめぐる政党政治の変化」

望月葵 (京都大学 J) 「隣接する『異邦』に暮らすシリア難民 : ヨルダンにおける『生存基盤』と『帰属問題』をめぐる考察」

上野祥 (東京大学 J) 「ムバーラク政権期エジプトの政治的抑圧 : 人権団体の報告書を中心に」

第5部会

谷憲一 (一橋大学 J) 「現代イランにおけるシーア派アルバイーン参詣の発展とその意義」

西川優花 (大阪大学 J) 「イラン乾燥地域における水のコモンス : ザーヤンデルード流域からの検討」

保井啓志 (東京大学 J) 「イスラエルの動物の権利に関する運動・ヴィーガニズム : ナショナリズムとパレスチナ問題の関わりから」

鷺見朗子 (京都ノートルダム女子大学) ・鷺見克典 (名古屋工業大学) 「アラビア語学習の契機、文化興味、学習結果 : アラビア語集中講座合宿の受講者を対象として」

Lee In-Seop (Hankuk University of Foreign Studies) “Index of Synthesis in Classical Standard Arabic”

第6部会

村上武則 (京都大学 J) 「変わりゆくクルド語出版 : 現在から過去へ」

岡崎弘樹 (日本学術振興会) 「現代シリア文学における〈パレスチナ〉 : 多元的なアイデンティティ形成」

ハディ・ハーニ (慶應義塾大学 J) 「パレスチナ問題における『民族自決』概念の批判的検討 : 初期パレスチナ解放闘争における内在化の過程を通じて」

早川英明（東京大学 J）「宗派主義をめぐるレバノン共産党系知識人の議論」

Kim Joong-Kwan (Dongguk University) “Governance Framework for Syrian Refugees in France: Social Integration and Cultural Assimilation”

ワリード・イブラヒム (カイロ大学)「普遍的価値を広める翻訳方略の確立に向けて：宗教的表現の翻訳を考える」

第7部会

早矢仕悠太（東京大学 J）「死地蘇生規定に関する学説相違にみる初期ハナフィー派の土地所有権取得観念」

大淵久志（東京大学 J）「ファフルッディーン・ラーズイーの政治神学」

相樂悠太（東京大学 J）「イブン・アラビー思想における『理性』（‘aql）の概念：『理性の限界の向こう』との関係に注目して」

澤井真（天理大学）「イブン・アラビー学派における完全人間論の展開」

近藤洋平（東京大学）「初期イバード派イスラーム法における先物売買の整備」

近藤信彰（東京外国語大学）「ガージャール朝『王室財産・ワクフ財台帳』の再検討」

第8部会

大河原知樹（東北大学）「『カーディー裁判』：そのイメージと現実」

秋葉淳（東京大学／千葉大学）「オスマン帝国史における捕虜と虜囚記（16-18 世紀）」

鈴木真吾（慶應義塾大学 J）「近代オスマン帝国都市における疫病防遏策の変容：イズミルの事例から」

松尾有里子（お茶の水女子大学）「20 世紀初頭イスタンブルにおける女性教師養成校（1909-1933）」

篠田知暁（東京外国語大学）「ワッター朝期マグリブ・アクサーにおける境域の統治者とポルトガル国王の外交交渉」

押尾高志（千葉大学 J）「16 世紀スペインにおけるイスラームとスペイン語：アラビア語写本からアルハミーア写本へ」

【公開講演会報告】

本講演会は、日本中東学会と秋田大学大学院国際資源学研究科および人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」の共催で開催されました。テーマとした「中東地域における多元的資源観醸成を目指して」は、これまで日本中東学会ではあまり取り上げられることなかった、「文理融合」や「学際研究」に着目して、その研究事例を紹介することにより今後の研究発展に繋がる話題を提供することを意図したものです。

講演会は、西尾哲夫（国立民族学博物館）、縄田浩志（秋田大学）、藤井光（秋田大学）、千代延俊（秋田大学）、渡辺寧（秋田大学）、保坂修司（日本エネルギー経済研究所）の6氏がそれぞれの研究、教育、実務の経験をもとに、中東地域研究や中東の資源を巡る問題について様々な角度から報告しました。その後、稲垣文昭（秋田大学）

を座長として、6名の報告者に安達毅（秋田大学）と坂梨祥（日本エネルギー経済研究所）を加えて討論が行われ、片倉邦雄（元駐UAE・駐イラク・駐エジプト大使）の「異文化間の交流ができるような文理融合を行うことが、相乗効果が生まれ今後の研究発展に繋がるであろう」とのコメントをもって総括されました。

以上の報告と討論から、会員諸氏の今後の研究発展に繋がる理学・工学分野と人文・社会科学分野、さらにはグローバルなレベルとローカルなレベルを架橋する話題を提供できたかと思います。（大会実行委員長 縄田浩志）

【研究発表会場から】

企画セッション1「中東の都市と農村における公共空間の変容」

本企画セッションは、現代中東地域研究上智拠点の研究活動の一環として、中東的な草の根レベルでの公共空間の実態を建築や歴史、人類学、政治学などのさまざまなディシプリンから多様な都市と農村の具体的な事例研究を行うことを目的に次の3つの発表から構成された。

第一の深見・吉村・宍戸会員の発表では、周辺住民を対象に深見会員（日本学術振興会カイロ研究連絡センター）がカイロ旧市街において行っている歴史的建造物保全プロジェクトを紹介した後、旧市街ダルブ・アフマル地区を事例に、吉村会員が同地区の公共空間として「サビール（水場）」を、宍戸会員（鹿児島県立短期大学）が伝統的喫茶店（アフワ）を中心とした公共空間の形態とその変遷の分析を紹介した。

第二の岡戸会員（上智大学）によるアレクサンドリアにおける上エジプト出身出稼ぎ者の事例報告では、アフワが同郷者の雇用・情報交換、教育の場として機能したことを指摘し、出稼ぎ労働者にとって都市労働市場への窓口として機能していたことを示した。

第三の北澤（京都産業大学）と岩崎（上智大学）の発表では、北澤会員が「部族」が多義的な方向で利用・強調される政治状況を指摘した後、岩崎がヨルダン北西部カフル・マー村のディーワーンを公共空間の事例として紹介し、公共空間が1960年以降大きく変容し、アシーラを基本単位としつつも、オープンなものになったことを指摘した。

最後に、企画セッション全体に対して、私市会員より、公共空間と排除についてコメントがなされた後、フロアからは街路の窪み（歪み）や公共空間の規模、ディーワーンを持たないアシーラなどに関して質問が寄せられ、排除の側面が課題として指摘されるなど、フロアの聴衆が少なかったものの、全体として活発な議論がなされた。

（岩崎えり奈）

企画セッション2「大塚モスクによる難民支援：在日ムスリムによる国際協力の一例として」

大塚モスク（東京）に本拠を置く日本イスラーム文化センター（以下、JIT）は、日本の国内外においてボランティア活動を熱心に展開する団体として知られている。本セッションのメンバー4名（子島進、岡井宏文、佐藤麻理絵、日下部尚徳）は、J

ITの難民支援に焦点を当て、社会支援の人的・経済的基盤や、そこで形成されるローカルならびにグローバルなネットワークについて共同研究を進めている。今回のセッションは、その最初の共同発表であった。JITは大塚モスク周辺の商店街との「ご近所付き合い」を重視しているが、彼らの作り出す支援のネットワークもまた、「グローバルご近所」とも言うべき関係性を生み出している。すなわち、在日シリア人のJITメンバーは故国での家族・親族、そして友人関係を発端としながらも、シリア人の多くが離散状態にある中で、情報伝達や資金調達、人的交流について、SNSを最大限活用して支援を展開している。このように、JITが日本の国際協力NGOとは異なるルートを通して、シリア国内の反体制派支配地域で人道支援に取り組む団体とネットワークを形成していることを報告した。一方、JITのロヒンギャ難民支援の調査に当たった日下部は、JITのバングラデシュ人メンバーが地元との関係を生かして形成したネットワークとの比較からコメントした。(子島進)

企画セッション3「アラビア語のダイグロシアの現在」

本セッションでは、まず榮谷温子（慶應義塾大学）が、当初はギリシャ語の状況を表していたダイグロシアという用語が、アラビア語の状況に転用されてからの動向についてまとめた。次のアラビア語エジプト方言版のウィキペディアについての発表では、インターネット上のものとはいえ、百科事典が方言で書かれている現象を取り上げ、ダイグロシアの枠組みの変化を指摘した。

次いで、モハンマド・ファトヒー会員（東京外国語大学・外務省研修所）は、まず、エジプトでの学校の内外でのフスハー学習の現状が詳しく報告し、それによるフスハーと方言すなわちアーンミイヤに対する意識の変化、ひいてはそれらの使用状況の変化を具体的に示した。従来、フスハーが用いられていた場面でも、今では積極的にアーンミイヤが用いられ、アーンミイヤで書かれた小説なども出ている。また、SNSでは、内容によってフスハーやアーンミイヤが使い分けられたり混用されたりする。電子メールでは状況によっては英語が普通に使われる。Badawi(1973)の言語レベル論からの大きな変化が強調された。

岡崎英樹会員（四天王寺大学）は、モロッコではH変種としてフランス語があり、いわゆる「ベルベル語」の母語話者も多く、そもそもアラビア語を中心に据えたモデルが適切かという問題のあることを述べた。さらに、モロッコ方言すなわちダーリジャで書くことについて、ダーリジャによる週刊誌の創刊そして廃刊、初等教育へのダーリジャ導入の頓挫などの実例を取り上げた。マスメディアや学校教育でのダーリジャの後退が伺われるが、他方、電子メディアではダーリジャ表記が普及してきており、ダーリジャはフスハーに取って代わるのではなく、それ独自の新たな役割を創出しているのではないかとの見解が示された。

近藤久美子会員（大阪大学）の発表は、急病のためキャンセルとなった。

質疑応答では、モロッコの、特に北部地域でのスペイン語の地位についての質問や、エジプトにおけるインターネットや衛生テレビなどによるフスハーの普及状況について、また、イスラーム主義者などのイデオロギーとフスハーの関係などについて質問

が寄せられ、発表者からさらに詳しい説明がなされた。

(榮谷温子)

企画セッション 4「多角的アプローチを通じて解明するシリア紛争の影響：人々の意識変化に関する量的研究、質的研究」

本セッションは、「今世紀最悪の人道危機」と称されて久しいシリア紛争（いわゆるシリア内戦）によって生じた難民・国内避難民（IDPs）に焦点を当て、彼らの意識に紛争がどのような影響を与えたのかを、計量学に代表される量的アプローチと地域研究の王道である質的（叙述型）アプローチを駆使して解明することをめざした。

コーディネータである高岡会員が、量的研究と質的研究の協働の意義について概説したのち、3名の報告者が報告を行った。

青山は2018年にシリア政府と北・東シリア自治局の支配地域で暮らすIDPを対象とした世論調査の概要を説明したうえで、量的研究と質的研究の手法をどのように組み合わせることで、ドナー国に対して彼らが持つ印象をどのように実態解明できるかを明らかにした。

浜中会員は、上記の世論調査と2017年にシリア国内で実施された世論調査の結果を比較し、国際政治理論を通じた量的分析を駆使して、IDPsとそうでない一般の市民の政治意識と彼らの社会階層の関連を明らかにした。またIDPsの調査で、政治的認知地図の要素とイデオロギーの相関を示した。

錦田会員は、ヨルダンやドイツでのシリア難民・移民を対象として実施した世論調査や聴き取り調査の結果をもとに、彼らの意識の違いを、難民や移民のパレスチナ人を対象とした意識調査から得た知見を活かしつつ解明した。

報告後は、質疑応答が行われ、フロアから、本セッションが対象としなかった諸外国（トルコなど）の難民の意識との比較の可能性、パレスチナ人（難民）の事例との比較の可能性などが議論された。

なお、本セッションで使用した資料は一部PDF化して、ウェブサイト「Contemporary Middle East Political Studies in Japan.net (CMEPS-J.net)」(<https://cmeps-j.net/ja/archives/2774>)で公開している。

(青山弘之)

企画セッション 5「ムスリム社会における社会的弱者の権利：子ども・患者・貧困者」

本セッションは、最近の中東諸国における「社会的弱者の権利」の制度化と実践に着目し、人権概念とイスラーム的価値観の双方が交錯する様相を、個別の事例に基づき検討した。

村上薫会員（アジア経済研究所）による趣旨説明に続き、小野仁美会員（神奈川大学）の報告は、離婚後の子の監護権を事例に、チュニジア社会では「子の利益」は個々のケースに応じて判断されること、これは古典イスラーム法の理解と共鳴するが、裁判官の直接的介入を認める点に現代の特徴があると指摘した。

次いで森田豊子会員（鹿児島大学）の報告は、イランの「子どもと若者の保護法」制定に至る議論を紹介し、子どもの保護の法制化が保守派と折り合いをつけつつ実現したと指摘した。

細谷幸子会員（国際医療福祉大学）の報告は、映画監督キアロスタミの死をめぐる遺族の問題提起を契機とする論争を紹介し、それがイランにおける「患者の権利」、とくに患者の「知る権利」への認識を高め、患者と医療者の関係性の理解の上でも転換点となったことを指摘した。

村上薫会員は、公的扶助を受給する「権利」が、実践の場では社会権に限らず相対的な権利としても語られる現状を紹介し、複数の権利概念の使い分けが話し手の社会的位置の正当化と関係する可能性を指摘した。

以上の報告にたいし、コメンテータの堀井聡江会員（桜美林大学）からは、古典イスラーム法学は弱者の権利について一律の基準に基づく一定の権利の保障ではなくケースバイケースに判断する立場をとること、従って司法の役割が大きい、それは四本の報告が示すように現代にも通じるという指摘がなされた。堀井会員からはチュニジアの裁判官の直接的介入の制度化およびイランの少年司法改革のそれぞれの国内的背景、患者への情報提供にかんするイスラームの見解、フロアからは国際機関から独立のトルコ独自の貧困線概念の有無などに関する質問が寄せられた。（村上薫）

企画セッション6「メディアとイスラーム思想／知の連環」

本セッションは、20世紀半ば以降の中東のメディアとイスラームとの接点を考察するものであった。まず、セッションの冒頭で、企画者の千葉悠志会員（公立小松大学）が趣旨説明を行った。これを受けて、3本の研究報告が行われた。まず、黒田彩加会員（日本学術振興会）が、「イジュティハードの雑誌」を謳い40年以上にわたって刊行され続けてきた『現代のムスリム』誌を取り上げ、同誌の概要や特徴、思想史上の位置づけを明らかにした。次に、相島葉月会員（国立民族学博物館）が、アズハル総長にしてラジオ知識人としても著名なアブドゥルハリーム・マフムードに焦点をあてて、彼の著作とラジオ講義の分析から、「教養としてのスーフイズム」の形成過程を論じた。最後に、千葉悠志会員が、20世紀半ば以降のメディアとイスラーム思想の関係を概観したのち、とくに1990年代以降のイスラーム思想を考えるうえで経済的な影響力が強まってきたことを、湾岸系の宗教放送およびその所有者に着目して論じた。質疑応答の時間には、メディアの形式／様式が各報告におけるイスラームをめぐる知や思想へと与えた影響や、また『現代のムスリム』誌の寄稿者と内容に関しての質問が寄せられた。（千葉悠志）

企画セッション7「サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマにおける半世紀後の再調査：片倉もとこ調査資料の活用とその展開」

本セッションでは、サウディ・アラビア西部のワーディ・ファーティマ地域において、文化人類学者片倉もとこが1960年代後半から実施した現地調査の成果に基づき、半世紀後に行なっている追跡調査について報告された。

冒頭では司会の片倉邦雄（片倉もとこ記念沙漠文化財団）から、当時の社会状況および片倉もとこの調査の経緯ならびに半世紀後に文理融合的な追跡調査を行う学術的意義が述べられた。

石山俊会員（国立民族学博物館）の報告は、オアシスの土地利用・農業の半世紀にわたる変容について、居住形態、生業、家畜数、農地（耕作）面積、生計における農業の比重について、半世紀の変容および課題を報告した。フロアからは水利用についての分析の必要性が指摘された。

次に遠藤仁会員（人間文化研究機構/秋田大学）による報告は、物質文化の側面から、伝統的な生業に関連したモノ、装身具の変化に着目した研究成果を報告した。また立体構造物、農具などの実測図や衣服などの展開図、高解像度写真撮影による建造物記録など、物質文化の記録プロセスについても報告し、文化資源化の意義について指摘した。

次に郡司みさお会員（片倉もとこ記念沙漠文化財団）による報告は、同地域の民族服飾を対象とし、半世紀前は既婚・未婚による違いが存在し、地域による差異を超えて個人が別地域の衣服を着用していた事例も報告された。くわえて現代との製作方法の変化、模様の復刻されていることも報告された。

そして藤本悠子会員（片倉もとこ記念沙漠文化財団）による報告は、片倉もとこの撮影写真を対象に、古写真研究の側面から、半世紀前の被写体および現地コミュニティと協働し、個人を同定し写真の利用許諾を得るプロセスおよび課題について報告した。調査の結果、一部手にモザイクを施した写真に関連し、フロアから経緯について質問が寄せられた。（片倉邦雄）

企画セッション 8「変容するエネルギー資源国のガバナンスの現状と課題：イラン、UAE、中央アジアの比較分析」

秋田大学国際資源学部と（財）エネルギー経済研究所の資源分野に関する協定締結を記念した本セッションでは、まさに両組織の特徴が現れた報告と議論が見られた。稲垣文昭会員（秋田大学）の報告は、「資源分配メカニズムの変化」と権威主義体制故の「大統領のパーソナリティ」の影響からウズベキスタンとタジキスタンの二カ国関係が対立から和解へと転じた背景分析を紹介した。

次に坂梨祥会員（エネルギー経済研究所）による報告は、イランの政治的発展過程における「イスラーム新思考」についての分析を紹介した。SNS などを通じて発信を続けるアブドルキャリム・ソルーシュに着目し、その思想がイランにおける選挙が義務としての投票から権利としての投票へと変容し、多元的主義的価値観をイラン社会が受容する道を開いたことを明らかにした。

最後に堀抜功二会員（エネルギー経済研究所）は、1990 年から 2000 年代にかけて外国人労働者が増加したことで、ナショナル・アイデンティティを巡る政治的・政策的論争が活発化したことを分析し紹介した。UAE 政府は「ナショナル・アイデンティティの年」とした 2008 年以降、文化的・歴史的アイデンティティ形成に取り組んできたが、特にアラブの春以降は、徴兵制の導入、国旗と殉教者の象徴化とともに他のアラブ諸国が避ける傾向にある部族を前面に出すことでナショナル・アイデンティティを強化していることを明らかにした。

資源国という共通項はあるが十分な比較の軸が定まっていないことへの疑問も提示

されたが、各報告内容に対するディスカッサントだけではなくフロアも全体を交えた形で議論が活発に繰り広げられ、資源国という枠組みでガバナンスの在り方を議論する必要性が再認識される企画となった。（稲垣文昭）

第1部会

第一の小野亮介会員（早稲田大学）の報告では、革命家であると同時にトルコ学者であるという複雑な顔を持つトガンの実像に迫るために、様々な敵対者からの批判に焦点を当て、数多くの史料を用いた実証水準の高い分析が示された。フロアからは、トルコの左派による批判についての補足説明、ライバルのタタール人知識人、イスハキーの手稿資料の未刊行の理由、トガンにトルコ移住を勧めたルザー・ヌールとの関係についてなど主に資料面に関する質問がなされ、報告者からは誠実な回答がなされた。

二番目の私市正年会員（上智大学）は、これまで FLN やウラマー協会を中心に描かれてきたアルジェリア・ナショナリズム研究の通説に対し、手書きのアラビア語新聞を資料にして地方のザーウィヤを中心とした民衆イスラームの役割を指摘する報告を行った。フロアからは、植民地主義と帝国主義の用語について、スーフィー教団とザーウィヤとの関係、新聞の記事執筆者の社会的出自について質問がなされ、民衆との関係などをめぐり活発な議論が行われた。（長沢栄治）

鈴木均会員（アジア経済研究所）の報告では、demodernization と Psycho-nationalism の二つを近代化考察の概念装置として紹介した。demodernization（近代化の退行現象）については、ヤコブ・ラブキン教授の Demodernization: A Future in the Past 紹介の形で議論を俎上に載せ、イラン現状の問題はアフガニスタン現状に通底するとして、ケシ栽培経済から一向に脱却できない現アフガニスタンの近代化退行現象に照らしても、安易な妥協を排し近代化を徹底すべきとの論者の見解が示された。また、アディーブ・モガッダム教授の言説、サイコナショナリズムについては、フェルドスィとイブン・ハルドゥーンをイランとアラブのサイコナショナリズムの比較例に挙げ、彼の研究紹介作業が進行中と述べた。またトランプ政権の対イラン政策はサイコナショナリズムやデモダナイゼーションの強要に繋がると指摘する共に、イスラエルでもデモダライゼーションが生じていることに言及した。近代化の思想的背景や政教分離に関する質疑応答がなされた。

次に、竹村和朗会員（高千穂大学）はエジプト国有地の人民による占有と国の奪回問題について報告を行った。所有権の対象となる土地は古典期には可耕地だったが、現代エジプトでは荒蕪地も含めた全国土が対象となり、広大な沙漠地が国有地となった。その後の法的整備で①国有地の占有原則禁止、②ただし証明がなされば所有追認、③さもなければ撤去、の三段階が基本枠組となった（1981 年）。しかし国有地占有は止まず、2012～13 年、県治安局が建物撤去を実施。2015 年、国有地返還請求委員会が設置されると“人民の権利のため”との言説浮上で、奪回地の競売利益も人民の権利として分配。さらに 2017 年、国有地処分手続きの新法成立で手数料や購入代価差額支払

いで、国有地の占有を追認することになった。以上、粗い要旨を述べたが、論者の報告は精緻な考察に立ち、熱意ある質疑応答が続いた。(富田健次)

高尾賢一郎会員（公益財団法人中東調査会）の報告では、正統スンナ派イスラームの盟主を自負するサウジアラビアにおける「公式」イスラーム言説が取り上げられた。特に、ムハンマド皇太子が標語に掲げる「1979年以前のサウジアラビア」を手がかりにその言説の今日的展開を考察し、その特徴をワッハーブ主義からサラフィー主義への言説のリブランディングと結論づけた。質疑では、従来流布していたワッハーブ主義やサラフィー主義の捉え方との関係性や相違が議論された。

石神美代子会員（九州大学・院）の報告では、クウェート政府による青年層向け企業支援策が取り上げられ、そうした政策は、「アラブの春」以降の政府の危機感に対する統治政策の一環であると結論づけられた。質疑では、この支援策導入の背景にある事実関係に対するコメントから支援対象となった青年層の属性に関する質問など今後の研究展開に期待を寄せる議論が活発に行われた。(長岡伸介)

第2部会

池端会員は、宗教間対話の分野において、21世紀以降、国際的イニシアティブを発揮しているヨルダンとイスラーム協力機構（OIC）の事例を取り上げ、その国際戦略と国連との関係について研究発表を行った。従来の国際関係学の研究枠組みでは十分に捉え切れなかった宗教的アクターの分析や、政治と宗教が複雑に交差する動態に着目した考察を展開した。フロアーからは、政治と宗教が相互に利用し合う側面についてと、また宗教間対話といった場合の無神論者の扱いなどについての質問が寄せられた。池端会員からは、ヨルダン国王や王族がその特殊な立場を生かして交渉し、国際社会からの承認を取り付けている現状が説明された。また特に宗教面の分析では、ウラマーを国際関係におけるアクターとして研究する必要があることが指摘された。

桐原会員は、ハラール産業の越境的動向を「グローバル・ハラール・ムーブメント」と命名し、それを商業面のみならず、宗教や文化的価値と関わる課題として捉え、イスラーム法の越境性とハラール認証制度の国際的展開を考察し、ハラール産業のグローバル化とローカル化の二側面とその相互作用を明らかにした。質疑応答では、ハラールのグローバル化とローカル化の定義や、ハラール認証の意義についての質問があり、それに対し、マレーシアのハラール産業のグローバル化が先導している現状や、世界各地でのハラール・エキスポの開催の一方、ローカルな条件に適したハラール産業の伸張について説明がなされた。いずれも若手研究者の意欲が感じられる報告で、議論も活発になされた。(鷹木恵子)

第2部会の第3報告では、野中葉会員（慶應義塾大学）による「現代インドネシア社会におけるニカブ着用現象」と題する報告が行われた。インドネシアにおけるヒジャーブ着用現象について研究成果がある報告者が、近年増加しつつあるとするニカブ着用に関して、調査結果をもとに現状と今後の動向について発表した。報告者

は、「ヴェール（ヒジャーブ）の多様化の延長線上のニカーブ」として、「ニカーブ着用はスナ」という意識の存在や SNS の影響の中で、社会的に活動する女性の間でニカーブ着用が増加していると指摘した。政治的な意義、消費文化、ソーシャルメディア、資本主義批判、階層との関係など多様な論点からの質疑応答が行われたが、現段階の調査は限定的であり、対象地域や対象となる階層などを拡大した更なる調査によって、ニカーブ着用現象の実像がより明確になると思われた。

第4報告では、足立真理会員（京都大学）が、同じくインドネシアのフィールド調査の成果にも言及しつつ「イスラーム経済思想における福祉的概念の探求：貧困の定義とマカーシド・シャリーア論の展開に着目して」として報告した。「インドネシアではザカートが慈善から義務へと再定義」され、「イスラーム的慈善の枠組みでザカートを語ることは困難」と述べ、インドネシアの生産的ザカートの実態について、ザカート管理団体の調査にもとづき報告を行った。質疑では、生産的ザカートの受給者、ザカート管理団体の実態、調査方法などが取り上げられたが、報告前半の経済思想における両義的な貧困概念と後半部のフィールド調査との関連付けがやや弱いような印象があった。両報告ともに、20 人を超える参加があり、活発な質疑応答が行われた。

（店田廣文）

野中恵子（一橋大学・院）会員は、これまであまり注目されてこなかった「平明丸事件」（1921）が、第一次大戦終結に関して重要な分岐点となったという分析を報告した。多くの事柄を指摘した意欲的な報告であったが、原稿を読むスタイルであったため、内容の理解が困難な部分があったこと、先行研究への批判に関してフロアから指摘があった。

次に清水学（（有）ユーラシア・コンサルタント）会員の報告では、秋田ゆかりの知識人・平田篤胤（1776-1843）や佐藤信淵（1769-1850）らの思想が、のちの日本の満州進出のイデオロギーとなったことと、モーゼス・ヘスらシオニズムの理論家たちの思想とを比較した壮大な研究報告であった。時間の都合上、駆け足の報告となったものの、清水会員がこれまで行ってきた研究を土台とした、日本とユダヤの近代史を交差させたもので今後の展開が楽しみなものであった。

（細田和江）

第3部会

大会2日目の第一セッションにもかかわらず、10 名を超える聴衆があり、興味深い報告と議論が行われた。Haidar Reda Mohamad 会員（千葉大学・院）の報告は、イラクにおいて、中央政府が地方統治のために部族組織をいかに再び利用し始めたかという点を具体的な事例を基に明らかにするものであった。発表は予定よりも手短に終わったが、その分フロアからは多くの質問が寄せられ、伝統的な方法で選出された部族長と政府によって任命された部族長の間の関係など、発表では詳しく言及されなかった点についても議論された。

次に Mostafa Khalili 会員（同志社大学・院）による報告は、イラン北西部スルドゥズ地方のカラパパク部族の間で、地元のクルド部族との対立を通して、部族意識とエ

スニックな帰属意識が入り混じった状態で強化されていく状況を解き明かすものであった。フロアからは、カラパパク部族が元来コーカサスからロシアに追われて移住してきた部族であることから、部族対立というよりはエスニックな対立という側面が当初から強かったのではないかという質問が寄せられた。

両発表は、「部族」という共通項をもとに、イランとイラクという隣りあう国の事例を扱うものであった。そのため、質疑応答を通して、現在のイラン（特に都市部）では一般に部族意識がかなりの程度薄れているのに対して、イラクではむしろ部族の重要性は高く、さらにそれが政治的に強化されつつあるということが明らかになるなど、事例比較の観点からも興味深いものであった。（三代川寛子）

午前の部の後半は、イランの政党、そして法学の問題を扱う二発表からなり、本部会全体の主題的多様性を前半の発表と共によく示した感があった。まずは Qolamreza Nassr 氏（広島大学）の "Obstacles of political Party Growth and Delay of Factional Coalition in Post-Revolutionary Iran" である。本発表は、政党は「政治システムと社会」を「仲介」する役割を持つにもかかわらず、ポスト革命期イランでは社会・政治的分極化（polarization）を示すようになったと指摘する。そして政党の発展の阻害要因として、その民衆的基盤の欠如、政治文化の脆弱性、宗教的「専制」と「教条主義」、さらに後二者の影響下にある文化構造と人々の共同体などを挙げる。フロアからはイラン社会の規定の方法や個々の市民の政治意識の捉え方などについて質問が寄せられた。

次の Scott Morrison 氏（Oxford Brooks University）の "Takaful (Insurance): Islamic Legal Arguments and Modern Structures" はイスラーム法における「相互保証」（タカーフル tafakul）、つまり相互扶助に資金を出し合う、慈善的な契約関係の問題を指摘する。自発的献金（tabarru'）とされ支払いの義務が無いこと、また慈善的性格から運営者の責任を契約的に明確化しにくいことなどである。この解決のために報告者は、英国法におけるトラストが慈善的性格を持ち衡平法（equity）により運用されるので、そのシャリーアへの「輸入」（import）を提唱する。フロアからはタカーフルと契約、トラストとの類似点と相違点などについて質問が相次いだ。（野元晋）

二ツ山達朗会員の報告は、チュニジア南部の村落での 2012 年からの継続調査に基づき、イスラームをめぐるモノの消費と空間的配置に着目した挑戦的な試みであった。報告では、日常空間に配置されたクルアーンの章句の一部が記されたポスターやステッカーの経年的な変化について細かな報告が行われた。今回の報告では、継続調査の結果として、いずれは空間のなかから装飾具がモノである限り、最終的には消滅していくということも示された。質疑応答では、装飾具と記された章句の内容との関係などの質問が寄せられた。モノがムスリムの行為、身体、空間をかたちづくるというアサドなどの議論を参照していることから、今後モノと空間的配置の関係だけでなく行為との関係についての議論も期待したい。

二ツ山会員による質的調査に基づく報告に続き、小島宏会員による報告は、90 年代半ばにベルギー在住のモロッコ・トルコ系を対象に行った計量を使った量的調査に基

づく報告であった。報告者は移動開始後 30 年を経た滞日ムスリムの分析へのフィードバックを意図しながら、移民の宗教実践について移民世代や、他宗教の分析で関連性が指摘されてきた兄弟姉妹構成に着目して分析を行った。分析結果は一部では報告者が期待したよりも正負の影響が読み取りにくい結果となったと謙虚に報告にあったが、その読み取りにくさもムスリム移民の分析においては示唆的であるようにも思われた。(黒田賢治)

第4部会

吉村貴之会員（早稲田大学）による「アルメニア人虐殺追悼集会からレバノン内戦へーレバノンのアルメニア人共同体政治の変容」では、東西冷戦下でレバノン在住アルメニア人が反ソ派・親ソ派に分裂した後、1970 年代以降のレバノン内戦に伴う共同体存亡の脅威によって一定の和解を果たし、内戦下で「積極的中立」路線を主張するに至った過程が解明された。フロアからはレバノン国内外の政治状況とアルメニア人共同体との関係に関する質問が寄せられた。

岡部友樹会員（京都大学）の「レバノン内戦とシリア内戦ー比較は可能か」は、レバノン・シリア両内戦の主要アクターである武装集団の「内部統制」が内戦の長期化・終結へいかなる影響を与えるのかを考察するものであった。岡部氏は組織的な「凝集性」の強弱が武装集団の生存期間と内戦後の政治動員を左右すると結論付けた。フロアからは、鍵概念である凝集性の操作化／評価方法や関係諸国など国外アクターの影響の有無などについて、質問・コメントが寄せられた。(横田貴之)

直前の発表の質疑応答がプログラム上の終了時間ギリギリまで続いたため、第4部会午前後半の部の研究発表は時間的にかなり窮屈になってしまった印象を否めないが、そこでの2つの報告はそれぞれ十分準備されており、盛りだくさんの興味深い内容であった。

まず山尾大会員（九州大学）の報告は、イラク国内の主要日刊紙『ザマーン』に掲載された2012年以降の記事25,080件を計量テキスト分析することで、本当にISが宗派主義を拡散させたのか、どういうときに宗派主義が政治的に重要になるのかを問い直し、現実には、ISの脅威が深刻化した時期に宗派主義に否定的な報道が増える一方、シーア派民兵によるスンナ派住民への嫌がらせなど、イラク人同士の宗派对立扇動が激化した時期には逆の傾向が見られることを明らかにした。これに対しフロアからは、『ザマーン』紙が示す報道の傾向にどれだけの普遍性があるのか、また報道機関の論調とイラク国民の宗派主義に関する考え方は必ずしも一致しないのではないかといった質問・コメントが寄せられた。

続く小山友（千葉大学・院）会員による報告は、オランダ労働党出身のトルコ系議員2名が2015年に設立し、2017年の下院選挙で3議席を獲得して初の国政移民政党となったDENKの台頭により、従来は労働党などの左派系政党を介する形で政治参加してきたムスリム移民の政党選好がどう変わったのかを、DENKとトルコ本国、特にAKPとの関係に注目して分析したもので、DENKを支持するトルコ系移民の大多数が

エルドアンを支持していること、ギュレン運動を除くオランダ国内のトルコ系宗教・政治運動は総じて DENK の選挙に協力した反面、トルコ系に匹敵するムスリム移民人口を持つモロッコ系は DENK への関心が低いことなどが指摘された。フロアからは「移民」に関係する用語の定義やトルコ系移民の投票率の推移などをめぐって活発な質問が寄せられた。(飯塚正人)

望月葵(京都大学・院) 会員は、2011 年にシリアで内戦が始まって以降、ヨルダンに避難した人々の帰属意識の所在について報告した。ヨルダンは難民条約について未批准であるものの、66 万人のシリア難民を受け入れている。報告者は 2017 年に 2 ヶ月ほどヨルダンを訪れ、イスラーム系 NGO による難民支援活動を展開するヨルダン人や、シリア難民への聞き取り調査を実施した。ヨルダン社会への不満やワタン(故郷)としてのシリアへの帰属意識を強調する一方で、アメリカやヨーロッパではなくムスリムの同胞がいるヨルダンに避難することを選択したという発言する難民も見受けられたという。パレスチナやイラクから流出した難民についての研究を行った会員からの質問やコメントが続き、中東の難民問題に関する研究の層の厚さを示していた。

上野祥(東京大学・院) 会員は、エジプト人権組織(Egyptian Organization for Human Rights: EOHR)が出版する年次報告書より、1993 年から 2009 年にかけてムバーラク政権が一般市民に対しておこなった政治的抑圧について報告した。2013 年以降、エジプトでは人権団体が次々と閉鎖されたが、EOHR は最古参の組織であり、政府との関係も良好であることから細々と活動を続けていることから、この団体を調査対象に選定した。既存の抑圧研究で看過されてきた、時間的経過に伴う政治的抑圧の対象や手段の変化について着目して資料を考察した。その結果、ムバーラク政権は、抑圧する対象に応じて戦略や手段を変えているものの、年代ごとの変化はあまり見られなかった。最後の発表であったにも関わらず、会場には沢山の会員が集まり、エジプト政治に関する関心の高さが伺えた。(相島葉月)

第 5 部会

谷憲一会員(一橋大学・院)の報告は、シーア派によるホセイン追悼儀礼の一環として行われるイランからイラクのカルバラーへの徒歩参詣の近年の隆盛が、メディアによるスペクタクル化やイラン政府系機関によるインフラの整備による「創られた娯楽」であることを明らかにしたものである。フロアからは参詣がイランの対外政策としてどのような意義をもつのか、またイラク政府にとっての意義はどのようなものであるかなどに関する質問が寄せられた。

続く西川優花会員(大阪大学・院)による報告では、イラン乾燥地域における河川水(表流水)の地域ごとの管理方法と流域間の水利権の調整に関して、農地改革前後の変化を整理した上で、近年は在地の所有概念と国家による水資源管理の間に齟齬が生じていることが明らかにされた。フロアからは主に、水資源の管理を行う国家の機構について質問が寄せられた。

本セッション最後の保井啓志会員(東京大学・院)の報告では、イスラエルにおけ

る動物の権利運動の一実践としてのヴィーガニズムをパレスチナの人権やLGBTの権利擁護と比較し、占領を隠蔽しながら先進性を対外的に宣伝できる手段として世俗主義的なナショナリズムと結びついてきたことが明らかにされた。主に対外的な効果に着目した本報告に対し、フロアからは国内の宗教派・世俗派の対立の中でのヴィーガニズムの位置付けに関する質問が寄せられた。(椿原敦子)

鷺見朗子会員(京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典会員(名古屋工業大学)による「アラビア語学習の景気、文化興味、学習結果—アラビア語集中講座合宿の受講者を対象として」は、2015年度・2016年度にそれぞれ四十数名を集めて行ったアラビア語集中講座合宿参加者に対するアンケート結果を分析したものであった。さまざまな質問項目を、統計学的手法を用いて分析したもので、その結果はおおむね予想されるものに合致していたが、説得力のある議論であった。教育上の工夫が学会発表で説明されることは比較的少ないが、会員の多くが教員か学生であることを考えると、研究の発表だけでなく、教育に関する発表がもっと増えて、会員の間にその理念やノウハウが共有されることが望ましいと感じた。(東長靖)

報告者は現在韓国中東学会会長を務める Hankuk University の Lee Inseop 教授で、報告内容は以下のとおりであった。アラビア語は、折中辞を使う言語、語根 屈折語、抱合語、テンプレート的言語という特徴を持っており、難しい言語といえる。本論文では古典標準アラビア語における Index of synthesis (以下 I of S と呼ぶ) (総合指数) を調査した。Index of synthesis は 1 つの word のなかに morphemes (形態素) がいくつあるかによって示される。たとえば、英語における I of S は 1.26 とされているが、現代標準アラビア語は 3.14 とされている。古典標準アラビア語のコーランとハディース(ブハーリー)について、それぞれ 10,000 words を対象に I of S を調べた。調査結果としてコーランは 4.9、ハディースは 5.0 という数値となり、大きな差はみられなかった。この理由については、今後検討していく必要がある。質疑応答では、現代標準アラビア語と方言を比べた場合、I of S は方言の方が低いということかという質問等がフロアから積極的に寄せられ、活発な議論が交わされた。(鷺見朗子)

第6部会

村上武則会員の報告「変わりゆくクルド語出版：現在から過去へ」では、近年、急速に拡大するクルド語出版の現状の一端が紹介されるとともに、主要方言の一つクルマーンジー方言の文法書の日本語訳に携わった経験が披露された。フロアからは、クルド語の正書法確立のための組織の有無や前近代のクルド語文献の事例について質問があった。

早川英明報告(「宗派主義をめぐるレバノン共産党系知識人の議論」)は、レバノン内戦中、「レバノン民族運動」が「政治的宗派主義の廃絶」を唱えながらも、運動内部では意見の対立もあったことに着目し、とくにレバノン共産党系知識人たちが党の活動との関わりの中で宗派主義をどのように捉えていたのかを検証したものである。会

場からは、当時のレバノンにどのような「労働者」がいたのかといった質問や、レバノン共産党の中に宗派主義を容認する意見があったのは、ロシア革命期におけるレーニンの姿勢にも対比できるのではないかといったコメントがあった。（山口昭彦）

二番目の岡崎弘樹会員による発表は、シリア人作家ワヌスの『陵辱』（1989）と、シリア在住パレスチナ人作家クルディーの『シャマアーヤ邸』（2010）を中心に、シリア文壇におけるパレスチナ描写の変遷を追ったものであった。ナクバ以降、シリアの文壇においてパレスチナ像は常にイデオロギー化されることを免れえなかったが、前者ではシオニズムとアラブの体制の同類性を指摘することによって、シリア人自身、アラブ人自身の自省を促す題材として扱われた。後者においてはナクバ第二世代の作者の背景が反映され、ダマスカスに生きるユダヤ教徒とキリスト教徒、ムスリムの交流から、多元的なアイデンティティを持つ者の葛藤が克明に描写される。概念を実体にあてはめるのではなく、実体から概念を問うという方向性に向かっており、シリア人がナクバと同様の体験をしている 2011 年以降、シリアの文壇でもパレスチナとシリアを重ね合わせる表現が出ていると発表者は指摘した。質疑応答では、シリアの一般社会への影響力や、発表媒体などについての議論が交わされた。

ハディ ハーニ会員による三番目の発表は、民族自決権という概念がいかにしてパレスチナ人の間で受容され、パレスチナ問題の解決のための「前提」とされるに至ったのかを、1918 年から 1921 年のパレスチナ側のディスコース分析から解き明かすという意欲的、かつ批判的なところみであった。各地のムスリム・クリスチャン協会内部からパレスチナ・アラブ評議会が形成される過程では、いまだパレスチナという集団的アイデンティティは生じておらず、民族自決や独立もほとんど意識されてはいなかったが、その後パリ講和会議や委任統治国であるイギリスへの使節派遣に至る経緯で、権利と独立が共起的に用いられるようになり、1921 年の第 4 回パレスチナ・アラブ評議会で、民族自決権がはじめて使用されるに至る。権利ディスコースと独立ディスコースが接合したのがこのときであると、ハディ会員は指摘する。質疑応答では、大シリアという枠組みでのアラブ・ナショナリズムからパレスチナ・ナショナリズムの転換点や、既存の研究との着眼点の相違などについて、議論が交わされた。

（菅瀬晶子）

大会要旨集によれば、Joong-Kwan KIM 氏（Dongguk University）の報告の主旨は、2011 年のシリア内戦勃発以降、トルコに大量流入したシリア人難民が、同国に与えた社会的、政治的影響を種々のソースを使って考察するというものだった。しかし、配布された資料（レジュメではなく論文）のタイトルは、“Governance Framework for Syrian Refugees in France: Social Integration and Cultural Assimilation” で、その論文を要約的に読み上げた本発表の内容も、当然のことながら、論文タイトルが示すものだった。発表は、先行研究および統計資料等を利用して、フランス社会におけるシリア難民の統合、文化的同化の様態について紹介した論文を読み上げるものだが、30 分の発表時間では、早口の英語でも論文の半分にも行きつかず、また、早口であったがために発表の主旨

を汲み取るのに難儀した。同じ時間帯に第4部会で、ヨルダンのシリア難民の発表があったが、内容的に、同分科会に設定されたほうが望ましかったと思われる。

第2報告は、ワリード・イブラヒム氏（カイロ大学）によるものだった。文学作品において、「異文化」をいかに翻訳するかは、つねに翻訳者を悩ませる問題である。ソース言語の文化的事象がターゲット言語の文化に存在しない場合（だからこそ「異文化」なのだが）、翻訳者は、そのハードルをいかにクリアするのか。井上ひさしの『父と暮らせば』をはじめ、『テーマ別・日本文学短編小説集「父」』『同「母」』など、すでに5冊もの日本文学のアラビア語の翻訳書をエジプトで刊行している発表者は、日本語テキストにおける、とくに宗教にかかわる文化的事象に焦点を絞り、それらをどのようにアラビア語に翻訳したか、日本語原文と、発表者によるアラビア語訳文を対比させながら、その具体的な実践例を紹介した。発表者のストラテジーは、アラブ文化、イスラーム文化のなかに等価物が見つかる場合には、積極的にそれを利用し、見つからない場合には、煩瑣な注釈を付すことによって読みの流れを阻害することを避け、大胆な意識をするというものであった。中東の諸言語で書かれた文学作品を日本語へ翻訳するという作業につねづね関わっている者にとっても、逆のベクトルの翻訳作業について具体的に知ることは多くの示唆に富み、文学研究者として個人的にもたいへん興味深く、有意義な報告だった。

第7部会

第7部会第1発表は、早矢仕悠太会員（東京大学・院）による「死地蘇生規定に関する学説相違にみる初期ハナフィー派の土地所有権取得観念」であった。ハナフィー派の通説では、死地（村落の外縁部にある誰にも属さない土地）を開墾した者にはその所有権が属するとされるが、学祖アブー・ハニーファはイマーム（カリフ）の蘇生許可が死地の所有権取得要件を構成すると主張し、一方、その弟子アブー・ユースフはその不要を唱えているという。発表者によれば、死地を含む武力制圧された国有地（サワーフィー）は、租税増収のために定義が拡大されていったが、新たに編入された土地には、カリフの排他的な処分権は及ばず、カリフは同地の管理者でしかないとされたことが、許可不要論の一因であると考えられる。参加者からは、死地蘇生規定における許可権者である「イマーム」の影響力について、死地蘇生規定における学説の相違はどこに行き着くのか、広い枠組みでの意義は何か、他地域他派について同様の規定はどう考えられているのかといった質問が寄せられた。

第7部会第2発表は、大淵久志会員（東京大学・院）による「ファフルッディーン・ラーズビーの政治神学」であり、ホラズムシャー朝の庇護下で活動したラーズビーの政治神学について、執筆年代順に分析したものである。初期の著作では、クライシュ族出身などのイマームの条件を挙げているが、しだいにイマームは必ずしもカリフに限定される語ではなくなり、広義の支配者（ライース）の必要性を説くように主張が変化した。最晩年の著作では、人間の魂たちは一つの類をなすが、連携する天体に応じて複数の種に区分され、各天体に由来する性質や特徴が各種内の人間に表出し優劣が生じるとしている。発表者は、ラーズビーの政治神学理論が王の支配を肯定してい

るのではないかとアイディアを示した。参加者からは、イマームとライースという二語に意味の互換性はあったのか、人間の魂が一つの類を構成するとしても支配者がいなければ共同体は崩壊するのではないかといった質問が寄せられた。いずれの発表も活発な質疑応答が行われ、大変意欲的かつ有意義な発表であった。（青柳かおる）

相樂悠太会員（東京大学・院）の発表、「イブン・アラビー思想における「理性」（‘aql）の概念：「理性の限界の向こう」との関係に注目して」は、イブン・アラビー（1240 年没）の思想形成に既存の思想潮流がどのような影響を与えていたのかを論じた。具体的な分析対象は『マッカ開扉』の「理性」批判である。相樂会員は、イブン・アラビーが「理性」の不完全性を論じ、「理性」を評価する「哲学」などの思想潮流を批判したことは、彼が神秘主義的霊魂論・認識論を展開した特徴的な側面でもあったと指摘し、既存の思想潮流に対する批判は、単なる拒絶ではなく、思想形成の動因ともなっていたと結論づけた。この発表に対して、聴衆から「理性」や「哲学」の原語と訳語、定義と概念をめぐる質問が出され議論が行われた。

澤井真会員（天理大学）の発表、「イブン・アラビー学派における完全人間論の展開」は、イブン・アラビーが『叡智の台座』で直接的に言及する「完全人間」は原人アダムであり、預言者ムハンマドが「完全人間」であるとは明言していないことを指摘し、「完全人間」という概念が後の思想家にどのように議論されたのかを考察した。取りあげた思想家は、クーナウィー（1274 年没）、ジャンディー（1291 年没）、カーシャーニー（1329 年没）、カイサリー（1350 年没）、ジリー（1424 年没）、ナーブルスィー（1730 年没）である。澤井氏は彼らの「完全人間」論を分析し、ムハンマドをアダムに優越する「完全人間」として論じる傾向と、アダムとムハンマドの役割を弁別しつつそれぞれが示す「完全人間」の普遍的姿を論じる傾向に分けられると整理した。この発表に対して、聴衆から「哲学（falsafa）」における「完全人間」についての補足と、アダムとムハンマドの関係に関する質問が提起され議論が行われた。

（森山央朗）

午後のセッションの最初は、近藤洋平会員（東京大学）による「初期イバード派イスラーム法における先物売買の整備」と題する発表があった。同氏はイスラーム法学説において諸説に分かれる先物売買について、学説を類型化する手法よりも、むしろ学者の交流や学統の流れを踏まえ時間的変化を視野に収めた考察を行った。また初期イバード派の先物売買をめぐる学説そのものについても、目的物、代金、質権や保証人のような履行方法など細目条件に関する学説をその多様性も含め整理をした。フロアからは、学説の正当性の根拠や学説類型論以外にどう説明するのか、など質疑があり、発表者は見通しを交え、要を得た応答をした。

次いで、近藤信彰会員（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）が、ガージャー朝初期に属する『王室財産・ワクフ財台帳』をめぐる諸問題について発表を行った。イラン全土の王領地、ワクフ財に関して、前代からの変容（概して荒廃）を記載した、同台帳が蔵する可能性を再考し、この台帳記載の情報には精粗はあるもの

の、全国を俯瞰できる意義や王朝交代による継承の意図などを指摘した。ワクフ研究は、イランのみならず、ひろく中東イスラーム圏に共通するテーマであるため、質問時間中途切れることなく質問やコメントが続き、関心の高さをうかがわせた。

(黒田卓)

第8部会

大河原知樹会員（東北大学大学院国際文化研究科）は、ヨーロッパ人の著作における「カーディー裁判 (Kadijustiz)」、「トルコの裁判」が意味する認識の違いを検証した。17世紀後半から20世紀初頭にかけて記された「トルコの裁判」は、悪しき裁判の代名詞のようであったが、他方、16世紀のオスマン帝国におけるヨーロッパ人は「トルコの裁判」の迅速さ、公正さを記した。「カーディー裁判」は分析概念であるので実態と違って良い、あるいは、ウェーバーは「カーディー裁判」と近代の法体系とが違うということを言いたかったのであって、実際のカーディーやウラマーについて良く知らなかったというフロアから指摘があり、活発な議論となった。

次の秋葉淳会員（東京大学東洋文化研究所／千葉大学）は、エゴ・ドキュメントへの関心が高まる中、近年公刊されたオスマン人の16世紀の虜囚記3点と、17世紀の虜囚記4点に関して、虜囚体験の特徴や彼らの語りの特徴について検討した。第一に、前者は、韻文2点、もう1点は韻文および散文で記され、海上で捕虜となり後、解放された者の著作で、後者4点はいずれも韻文で記され、陸上戦等で捕虜になった者の著作である。第二に、前者は、捕虜の境遇への悲嘆が記されたのに対して、後者は、冒険譚や滞在記などで外国・異文化への関心の高まりが確認された。虜囚記は誰に向けて書かれているのか、解放されるために書いたのかという質問へは、解放後に書かれたものだが誰へ書かれたのかに答えることは難しく、スルタンに献呈されたものではないとの返答があった。16世紀半ばと17世紀末における時代の違いについては、後者にはエヴリヤ・チェレビーの旅行記などによる文学的伝統の展開との関連があるのではと返答された。

(江川ひかり)

本会場では引き続きオスマン史・トルコ史関連の報告が2件あった。

鈴木真吾（慶応義塾大学・院）「近代オスマン帝国都市における疫病防遏策の変容：イズミルの事例から」は、1910-11年に国際貿易港イズミルを襲ったコレラに対するオスマン政府の対応を、トルコ、フランス、イギリスの一次資料等に依拠しつつ、1893年のコレラ流行時の対応と比較して論じるものであった。19世紀前半以来のオスマン帝国の疫病・医療の歴史を背景に、二つの流行の間に帝国細菌学研究所設立（1894年）を初めとする専門的研究教育機関が整備されたがゆえに、1910-11年には罹患発生場所がすみやかに特定され、患者の隔離処置がなされて、関係地区の上下水道の管理が徹底されるなど、より合理的な対応が可能となったことが明らかにされた。当時の記録に基づき、イズミル市街の地図上にこれらの場所を特定するのが可能となり、オスマン都市社会史研究の新たな展開を見ることができた報告であった。質疑においては、都市内部での患者隔離の実態や病死者の埋葬場所の問題、住民のコレラに対する認識

の共有等について議論された。

松尾有里子（お茶の水女子大学）「20 世紀初頭イスタンブルにおける女性教師養成校（1909-1933）」は、オスマン帝国末期の第二次立憲制期（1909-18 年）と 1933 年までの共和国初期を中心に、当時の女子教育の最高機関として機能したイスタンブルの「女子師範学校」とその後継機関としての「イスタンブル女性教師養成校」について、設立の由来（1870 年）から授業の教科科目の変容、学生数や卒業生の変動まで、年鑑や文書局資料に基づいた詳細な情報に富む報告であった。帝国から国民国家への激変期に生じた公教育の位置づけの変化を反映すると同時に、教員資質向上のための制度改編や教科科目の拡充、教員職を目指す女性の増加や首都・地方間の女性の移動の活発化など、すでに帝国末期から始まって共和国期に連続した動きもあったことが指摘された。質疑においては、多数の入学者の教員キャリア所持から女性教員再教育の側面や、教科内容等を決定する側の男性が女子教育を規定するジェンダー問題等をめぐって議論があった。（黒木英充）

若手の歴史研究者ふたりの発表を聞いた。どちらもこれまでにほとんど利用されてこなかった史料を発掘し、それをもとにしての新たな視点からの研究であった。篠田知曉会員（東京外国語大学）の報告は、15 世紀のワッターズ朝期マグリブ・アクサーにおいて、キリスト教圏とイスラーム圏の境域にあたる領域を支配する統治者が、中央政権との関係において複雑な利害関係のなかで境域維持のためにさまざまな戦略を講じていたことを示すことで、境界領域においてこそ顕現する人的ファクターの諸相を明らかにした。

次に押尾高志会員（千葉大学・院）による報告は、アルハミーアとよばれる、アラビア文字を用いてロマンス諸語を記した資料のなかでもスペイン語資料をもとに、イベリア半島のキリスト教支配下に移住したムデハルとよばれるムスリムや、16 世紀初頭にカトリックへ強制改宗させられたモリスコとよばれる人びとのあいだで、いかにイスラーム知識が伝承されていたかを明らかにした。前者の発表とあわせて、「共生」という言葉やテーマが安易に担ぎ出される現在の学問風景のなかで、当時の人びとの肉声が伝わるような同時代資料をもとに個々の人間の活動の面から文化衝突や異文化共生を射程にして考察しようとする態度に共感をおぼえた。（西尾哲夫）

【第 35 回年次大会を終えて】

第 35 回年次大会は、2019 年 5 月 11 日に秋田市にぎわい交流館 AU、同 12 日に秋田大学手形キャンパスにて開催されました。

11 日の公開講演会「中東地域における多元的資源観醸成を目指して」は、秋田大学大学院国際資源学研究科および人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」の共催で開催され、日本中東学会会員が 126 名、秋田大学の学生、一般市民が 78 名の計 204 名が参加しました。日本中東学会ではあまり触れられることのない文理融合的な学際研究の事例と視点から中東地域にフォーカスを当てた講演会では、会員諸氏の今後の研究発展に繋がる理学・工学分野と人文・社会科学分野、さらには

グローバルなレベルとローカルなレベルを架橋する話題を提供できたかと思います。その後、同じ会場で総会も行いました。本公開講演会の様子は、秋田魁新報 2019 年 5 月 17 日朝刊 25 頁に「日本中東学会講演会 エネルギー資源、持続的利用学ぶ」として紹介されました。

総会終了後、会場前の広場にて秋田大学竿燈会による妙技披露が行われました。臨場感あふれる東北の夏祭りの醍醐味を会員の皆様に楽しんでいただいた後、秋田キャッスルホテルにて、韓国中東学会の来賓も加わり、懇親会を行いました。秋田の地酒や地元食材を使った料理とともに、楽しい歓談のひと時を過ごすことができました。なお、韓国中東学会の来賓の先生方には、韓国から留学中の秋田大学大学院生のアテンドで、午前中には足をのばして田沢湖周辺をご案内させていただきました。

2 日目は 8 つの会場にて、個人研究発表 47 件、企画セッション 8 件と、活発な議論が行われました。エクスカッションとして、昼の休憩時に秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館の展示案内を行ったところ、多数の参加者があり中には数時間以上も展示内容を満喫された方もいらっしゃいました。参加人数は日本中東学会会員、一般参加者、韓国中東学会からの来賓をふくめ計 190 名でありました。

以上のように、第 35 回年次大会は学会発足以来、秋田での初の開催でありましたが、全般的に盛況で成功を収めることができました。今回の年次大会は例年に比べ開催校の実行委員の数が少なく、国立民族学博物館の先生方の貢献によるところが大きいものであります。ただし遠距離でもあるため、十分な打合せができなかったこと、事前準備等で特定の実行委員に過度の負担を強いる結果となってしまったことなど、反省点も多くありました。

しかしながら、大きな問題も起こることもなく、無事に第 35 回年次大会を終えることができました。これもひとえに大会出席者の皆様のご協力の賜物と感謝する次第であります。どうもありがとうございました。(縄田浩志 大会実行委員長)

【大会決算】

日本中東学会第35回年次大会決算				
収入の部			支出の部	
会場費	〈学会本会計より〉	155,430	会場費(秋田市にぎわい交流館AU・秋田大学)	155,430
大会開催費	〈学会本会計より〉	400,000	印刷代(レジュメ・要旨集・封筒等)	306,214
大会参加費	〈事前支払 129名〉	129,000	郵送費(プログラム他)	113,006
	〈当日支払 44名〉	88,000	1日目アトラクション(竿燈)謝礼	100,000
懇親会費	〈一般事前支払 75名〉	450,000	懇親会費(地酒代含む)	651,592
	〈学生事前支払 16名〉	64,000	アルバイト代	286,105
	〈一般当日支払 25名〉	175,000	1日目スタッフ等お弁当代(パネリスト・委員・アルバイト)	23,340
	〈学生当日支払 5名〉	25,000	1日目パネリスト飲料代	1,061
書店寄付・教室使用料(2店分)		10,000	2日目スタッフ等お弁当代(来賓・委員・アルバイト)	28,461
お弁当・飲み物代		73,000	お弁当・飲料代	70,922
秋田コンベンション協会寄付金		208,000	消耗品費(文具代等)	1,080
			振込手数料	4,752
			大会開催費余剰金(年次大会特別基金に繰入)	35,467
収入合計		1,777,430	支出合計	1,777,430

託児所決算			
収入の部		支出の部	
利用者負担(1日につき3000円)/1日目3名・2日目4名	21,000	託児所運営委託費	47,500
学会本会計より補填	26,500		
収入合計	47,500	支出合計	47,500

第7回日本中東学会奨励賞の選考結果

第7回日本中東学会奨励賞に関して、受賞論文、選考過程、受賞理由を報告いたします。

日本中東学会奨励賞選考委員会（東長靖第16期会長、栗田禎子第15期会長、近藤信彰『日本中東学会年報』第17期編集委員長）は、2019年5月11日、以下の論文を第6回日本中東学会奨励賞の受賞作とすることを決定いたしました。

OBUCHI Hisashi (大淵久志), “Fakhr al-Din al-Razi and Occult Science as Philosophy: An Aspect of the Philosophical Theology of Islam at the Beginning of the Thirteenth Century”, *AJAMES*, 34-1 (2018), pp. 1-33.

【授賞理由】

本論文は、ファフルッディーン・ラーズィーの哲学思想の魔術的側面に焦点を当て、従来のスンナ派神学と哲学の融合に大きな役割を果たしたとされるラーズィーの新たな側面を明らかにした論考である。本論文の問題設定、分析視点および実証方法は、イスラーム思想研究において、国際的にも十分に価値があると評価しうる論文である。よって本論文を第6回日本中東学会奨励賞として推薦いたします。

なお、本賞の副賞は、片倉もとこ研究奨励基金からの賞金である旨を申し添えます。

(奨励賞選考委員会 委員長：東長靖)

【受賞の言葉】

このたび第7回日本中東学会奨励賞をいただくこととなり、わたしでよいのかという戸惑いのきもちは大きいですが、たいへん光栄に存じます。受賞対象となった論文は、2016年度に提出した修士論文で残された問題のひとつに取り組みなおしたものです。ファフルッディーン・ラーズィー（1210年没）という「正統派」の思想家を描写するにあたって捨象されてきた側面に光を当てました。これはわたしには手に余る題材で、今読み返すと改善すべき点は次々と見出されるのですが、指導を学部以来担当してくださっている菊地達也先生ならびに査読者の方々にいただいたコメントがあつてこそひとつの形にすることができました。わたしが多くを学んだその他の先生方、先輩、後輩、友人たちの存在もちろん欠かせないものです。博士論文ではラーズィーの直弟子ザイヌッディーン・カッシー（1228年以前没）の道德哲学の研究に取り組みます。師の跡を継ぎ宮廷に庇護された彼は、その名が歴史からはほとんど消えてしまっ

ています。わたしは現存する二作品の読解をつうじて、ラーズィーとの師弟間のみならずこれを基点とするイスラム思想史が描かれ、さらには「宗教と理性」というような難題が背景に照らしだされるような文章を書きたいと考えております。理想ばかりで非常に困難な仕事ですが、このたびの受賞をひとつの弾みとして邁進してまいります。今後ともご指導よろしくお願いします。(大淵久志)

第 36 回年次大会の開催について

2020 年度の日本中東学会第 36 回年次大会は、桜美林大学が開催当番校をお引き受けすることとなりました。日程は 2020 年 5 月 16 日(土)・17 日(日)の両日で、会場は桜美林大学新宿キャンパス(東京都新宿区百人町 3 丁目 23-1)です。最寄り駅は、新大久保駅(JR 山手線)あるいは大久保駅(JR 中央・総武線)です。実行委員会を中心に土曜日の講演会等をこれから企画いたします。新宿キャンパスは、新大久保駅からは、百人町通り、通称「イスラーム通り」とも呼ばれるハラル食品店が多く立ち並ぶ通りのその先にあります。多文化共生の町での年次大会に、多くの皆さまがご参加下さいませよう、大会実行委員一同、お願い申し上げます。

(大会実行委員長 加藤朗)

第 25 回公開講演会のお知らせ

日本中東学会第 25 回講演会を下記の通り開催いたします。

「素顔の中東・イスラーム」

日時：2019 年 11 月 17 日(土) 14:30-18:30

会場：山口市民会館小ホール(山口県山口市中央 2 丁目 5 番 1 号)

アクセス <http://yamaguchi-civichall.com/access>

講演者：

藤村泰夫(山口県立西京高等学校)

鳥山純子(立命館大学)

黒木英充(東京外国語大学)

山口県立西京高等学校・山口県立柳井高等学校生徒有志のみなさん

鈴木均(日本貿易振興機構アジア経済研究所)

今回の講演会は、日本の多くの市民が持っている中東やイスラームは分かり難いというイメージを払拭するために、中東やイスラームに対しても、当たり前人間が行う当たり前の営為に常識にしたがって共感的にアプローチするのでよいのだという

メッセージを発することを目指します。そのために、日本における中東・イスラームのイメージ形成に大きな役割を果たしている高等学校の世界史教育の現場に取材した藤村氏の講演に、中東地域研究の立場から鳥山会員と黒木会員による講演を絡めます。続けて、山口在住のイスラーム教徒の日常生活に関して西京高校・柳井高校生徒有志が研究発表を行い、1930年代のアフガニスタンに暮らし後世に貴重な資料を残した尾崎三雄（山口県防府市出身）を紹介する講演を鈴木会員が行います。

（森山央朗 企画担当理事）

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

- ・ 35-1 号を7月に発行いたしました。
- ・ 35-2 号投稿論文の審査を行っております。投稿いただいた方には8月に入ってから審査結果をお知らせいたします。
- ・ 36-1 号の投稿締め切りは12月1日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げております。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

明治大学情報コミュニケーション学部 横田貴之気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

（横田貴之 AJAMES 編集委員長）

寄贈図書

【単行本】

イディリス・ダニシマズ『トルコにおけるイスラーム神秘主義思想と実践』ナカニシヤ出版、2019年

ヴァレリー・ゼナッティ、伏見操訳『瓶に入れた手紙』啓林館、2019年
間寧（編集）、中村 覚（監修）『トルコ（シリーズ・中東政治研究の最前 1）』ミネルヴァ書房、2019年

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

Oman Fathurahman, KAWASHIMA Midori, Labi Sarip Riwarung, eds., *The Library of an Islamic Scholar of Mindanao: The Collection of Sheik Muhammad Said bin Imam sa*

Bayang at Al-Imam As-Sadiq (A.S.) Library, Marawi City, Philippines: An Annotated Catalogue with Essays, Institute of Asian, African and Middle Eastern Studies, Sophia University Occasional Paper 27, 2019.

TONAGA Yasushi, FUJI Chiaki eds., *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies*, Kenan Rifai Center for Sufi Studies 3, 2018.

会員の異動

【新入会員】

木戸皓平
清 全
住吉大樹
水上遼
田嶋望
渡部敬子
木下実紀

【2018 年度末をもって退会した会員】

相川洋介	安藤潤一郎	イ ジョン	井口有奈
石川基樹	石田正孝	伊藤寛了	井上貴智
上野恵以奈	遠藤春香	大橋一寛	大道 峻
小川浩史	小田淑子	片岡麻美	角和昌浩
勝本英明	加藤眞佐美	兼川千春	荻屋紀子
河田尚子	川畑亜瑠真	小村明子	清水訓夫
清水順一	清水直美	志村文子	鈴木珠里
鈴木日出生	関口陽子	園中曜子	武田歩
蓼沼理絵子	田村幸恵	爲永憲司	
ディミタル・ミハイロフ・デイミトロフ		陶 李	富樫茂
外川昌彦	徳永恭子	戸塚邦子	飛奈裕美
富永枝里香	中島隆晴	中野愛美	中村亮
南里浩子	西野節男	乗松彩奈	萩原優
林真由美	速水美緒	番匠未来	福盛貴弘
藤田純子	藤由順子	星光孝	堀尾藍
増野伊登	松浦由佳子	松長昭	三上哲史
宮崎正直	森岡知子	柳沼豊	
レヴェント・シナン		若桑遼	渡辺正晃
El/Mostafa Rezrazi	Esta Tina Ottman	Michael Eric Penn	
Mohammad Qasim Wafayazada		Nouh Samir Abdel Hamid	
Ratib Muzafary	Salih M. Samarrai	Salimur Rahman Khan	

Tash Mehmet

【連絡先をご存じないですか】

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

武藤幸治	千代崎未央	アレズ	ファクレジャハニ
田中好子	斎藤正道	岡野恭子	大工原桂
森田昌宏	横田吉昭	横内吾郎	角田紘美
餅井雅大	Khalil Dahbi	高橋信一郎	桑原尚子
タキデ モハマッド		MORRISON	Scott
川上重夫	成地草太	李若非	蔣旭棟

事務局より

【名簿を発行します】

8月末に2019年-2020年度の会員名簿をお送りいたします。情報に誤り・変更のある方は、事務局までメールにてご連絡お願いいたします。

【銀行口座・インターネットバンキングからも学会費をご納入いただけます】

名簿と同封で2019年度分の学会費振込用紙を送付いたします。ゆうちょ銀行窓口・ATMよりお早目の納入をお願いいたします。

インターネットバンキングや通常の銀行振り込みをご希望の方は、三井住友銀行渋谷支店(普)5346808か、ゆうちょ銀行〇一九店(当)0161096宛てにお振込みください。

振込人名をもとに納入状況を管理しておりますので、学会に登録されているお名前以外の口座からお振込みされる方は、事務局までご一報ください。(安田慎 事務局長)

編集後記

慣れない編集作業のため不手際が多く、原稿を書いてくださった会員の皆様にはご迷惑をおかけしました。次号以降での改善をめざします。

(秋葉淳 ニュースレター担当理事)

日本中東学会ニューズレター 第156号

発行日 2019年9月12日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町1300

高崎経済大学 安田慎研究室

E-mail: james@james1985.org

<http://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)

銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808

(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)